

鶴田 I 遺跡

— 本 文 編 —

2008年

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所都市建設部建設課

市道川井山梨線新設工事
に伴う発掘調査報告書

鶴田Ⅰ遺跡

— 本文編 —

2008年

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所都市建設部建設課

例 言

1. 本書は、静岡県教育委員会による「土木工事等のための発掘調査に係る指示について（通知）」に基づく、正式報告書である。
教文第 783号 平成17年8月2日（平成17年度調査区）
教文第 529号の2 平成18年6月23日（平成18年度調査区）
2. 本書は、静岡県袋井市下山梨字鶴田2240-2番地ほかに所在する、鶴田Ⅰ遺跡（つるたいちいせき・遺跡番号124）に関する発掘調査報告書である。
3. 本書は、「市道川井山梨線新設工事」に伴う発掘調査として、平成17度から18年度にかけて実施した作業のうち、遺構と遺物の状況を報告した『本文編』である。
4. 本書の編集及び、現地発掘調査は、袋井市教育委員会の白澤 崇が担当した。
5. 本調査に関する事務及び調整は、袋井市役所建設経済部建設課道路係が行った（関係者名は、本書の「調査体制」に明示）。
6. 本書の遺物実測及び製図、写真撮影は、白澤が主担し、鈴木浩子が補佐した。但し、第24図の石製品の実測及び製図については、松井一明氏の協力を得た。
遺構図は、業務を委託した株式会社フジヤマ（浜松市元城町216-19）が図化したものを主に使用し、一部を鈴木が編集・製図した。
遺物の整理・復元作業は、船越スミ子と、梶山仁美が主担した。
7. 本書に関係する資料は、袋井市教育委員会で保管している。
8. 本書作成にあたり、以下の方々の協力を得た。記して感謝申し上げます。
松井一明 足立順司 川江秀孝 （順不同）

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
3 調査経過	2
第Ⅱ章 地理的・考古学的環境	5
第Ⅲ章 基本層序	5
第Ⅳ章 調査状況	11
1 地区の設定	11
2 遺構【東工区】	11
3 遺構【西工区】	14
4 遺構【第1工区】	17
5 遺構【第2工区】	17
6 遺構【第3工区】	19
7 遺物【土器】	21
8 遺物【木製品】	31
9 遺物【石製品】	34
10 遺物【土製品】	34
第Ⅴ章 まとめ.....	34

実測図版目次

- 第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25000)
- 第2図 東工区・第3工区土層図
- 第3図 1 : 800全体図
- 第4図 1 : 200遺構図 1
- 第5図 1 : 200遺構図 2
- 第6図 1 : 200遺構図 3
- 第7図 1 : 200遺構図 4
- 第8図 東工区SD2遺構・遺物出土状況実測図
- 第9図 東工区SD7／西工区SD6遺構・遺物出土状況実測図
- 第10図 東工区SH1・2遺構実測図／
西工区SX1遺構・勾玉出土状況実測図
- 第11図 西工区SD1・2遺構・遺物出土状況実測図
- 第12図 第1工区SD4／第2工区SX1・2／第3工区SD2
遺構・遺物出土状況実測図
- 第13図 第2工区SD3／第3工区SD1遺構・遺物出土状況実測図
- 第14図 土器実測図 1
(1～6＝東工区SD1／7～10＝東工区SD2)
- 第15図 土器実測図 2
(11～24＝東工区SD2／25・26＝東工区SD3／27～32＝東工区SD4)
- 第16図 土器実測図 3
(33～46＝東工区SD7／47～50＝西工区SD6)
- 第17図 土器実測図 4
(51～56＝東工区SD8／57～59＝東工区SD12／60・61＝東工区P-2／
62＝東工区P-5／63・64＝東工区包含層／65＝東工区P-43)
- 第18図 土器実測図 5
(66・67＝西工区SD1／68～74＝西工区SD2上層／75・76＝西工区SD2下層)
- 第19図 土器実測図 6
(77～88＝西工区SD2下層)

第20図 土器実測図 7

(89=西工区 P-20/90=西工区 P-26/91=西工区 P-35/92=西工区 P-38
/93=第1工区 S D 1/94=第1工区 S D 2/95・96=第1工区 S D 4/
97~99=第1工区 P-9/100=第1工区 S X 1/101・102=第2工区 S D 2)

第21図 土器実測図 8

(103~117=第2工区 S D 3)

第22図 土器実測図 9

(118・119=第2工区 S D 4/120~123=第2工区 S D 5/124~129=
第3工区 S D 1)

第23図 木製品実測図 1

(130=東工区 S H 1/131=東工区 P-47/132~134=東工区 P-52
/135・136=東工区 P-53/137=東工区 P-54)

第24図 木製品 2/勾玉 1/石器 1/台盤状土製品 1 実測図

(138=西工区 P-40/139= S X 1/140=第1工区 S D 4/141=
第2工区 S X 1/142=第3工区 S D 1/143=東工区 S D 12/
146・147=東工区 S D 8)

表 目 次

表1 遺物取り上げ(管理)表 1

表2 遺物取り上げ(管理)表 2

写真図版目次

図版 1 遺物写真 (1) 土器

(1・3=東工区 S D 1 / 7~10=東工区 S D 2)

図版 2 遺物写真 (2) 土器

(14~17・21=東工区 S D 2 / 26=東工区 S D 3 / 30=東工区 S D 4
/ 33=東工区 S D 7)

図版 3 遺物写真 (3) 土器

(39~40・44・45=東工区 S D 7 / 47・48=西工区 S D 6)

図版 4 遺物写真 (4) 土器

(51・54・56=東工区 S D 8 / 58=東工区 S D 12 / 60=東工区 P - 2
/ 69・71・72=西工区 S D 2)

図版 5 遺物写真 (5) 土器

(75・80~83=西工区 S D 2 / 89=西工区 P - 20)

図版 6 遺物写真 (6) 土器

(92=西工区 P - 38 / 94=第 1 工区 S D 2 / 101・102=第 2 工区 S D 2
/ 106・108~110・115=第 2 工区 S D 3)

図版 7 遺物写真 (7) 土器

(117=第 2 工区 S D 3 / 118=第 2 工区 S D 4 / 124~127・129=
第 3 工区 S D 1)

図版 8 遺物写真 (8) 木製品

(130=東工区 S H 1 / 132=東工区 P - 52 / 135=東工区 P - 53 /
137=東工区 P - 54 / 138=西工区 P - 40 / 144・145=西工区 S D 2)
※144・145は写真のみ実測図無し

図版 9 遺物写真 (9) 勾玉・石器

(139=西工区 S X 1 / 140=第 1 工区 S D 4 / 141=第 2 工区 S X 1
/ 142=第 3 工区 S D 1 / 143=東工区 S D 12)

図版 10 遺物写真 (10) 鶴田 I 遺跡発掘調査全景

(合成写真・画面下側が北)

第Ⅰ章 調査経過

1 調査に至る経緯

土木課の依頼を受けて、平成15年10月14日～16日にかけて、市道川井山梨線道路整備予定地の試掘調査を実施し（文化財係・永井義博担当）、遺跡範囲の把握に努めた。総数25箇所における試掘坑の調査結果から、新発見の平字遺跡をはじめ、川田遺跡・鶴田Ⅰ遺跡の状況が明らかとなった。

平成16年11月10日袋土第458号により、土木課長から生涯学習課長あてに「発掘調査に伴う学芸員の派遣（依頼）」が提出された。これを受け、平成16年12月15日付袋教生第229号によって、土木課長あてに「発掘調査計画書」が提示された。本計画では、現道下部を調査対象とし、全面通行止めを行い、1ヶ年度で調査を終了する予定であった。

平成17年に入り、担当が土木課から道路河川課に移ったことを受け、道路工事との調整を再度行った。この結果、当初計画では全面通行止めによる調査であったが、調査直前になって、地元企業から関係車輛の往来確保が強く望まれたため、計画を変更し、全線をほぼ中央で分割し、「北工区」と「南工区」とした。更に、それぞれの工区について、南北交通を確保しながら、片側通行による調査を実施することとした（袋教生第72号 平成17年6月21日付 北工区発掘調査計画書）。

平成18年には、南工区の調査を実施し、現地調査を完了した。但し、当初計画では（袋教生第277号 平成18年3月2日付 南工区発掘調査計画書）、年度内に資料整理を完了する予定であったが、新たに、下山梨山科線における発掘調査が急務となったため、整理作業を19年度に変更し、対応した。

2 調査体制

袋井市教育委員会・事務局（＊：現地調査担当者 ・ ◎：資料整理担当者）

教 育 長 戸塚雅之（平成17年度～平成19年度）

教 育 次 長 山本淳司（平成17年度）

教 育 部 長 根津幸久（平成18～19年度）

主 席 参 事 小粥保夫（平成19年度／生涯学習課長兼務）

生涯学習課長 伊藤 覚（平成17～18年度）

課 長 補 佐 秋田勝美（平成17年度／総括係長兼務）・寺田勝美（平成19年度）

主 幹 寺田勝美（平成17～18年度）

文化財係長 山本義孝（平成17～19年度）

主 査 松井一明（平成17～19年度）・水野雅彦（平成18～19年度）

主任学芸員 白澤 崇（平成17～19年度） ＊ ◎

経 理 事 務 鈴木寿美子（平成17年度～平成19年度）

現地作業及び資料整理参加者

佐々木次郎 鈴木靖孝 鈴木義彦 萩田権治 中村房男 近藤三雄 溝口清次
内山孝彦 早川トミ 前嶋さとし 船越スミ子 梶山仁美 鈴木浩子

都市建設部

道路河川課長 金原基弘 (平成17年度)
課長補佐 西尾一馬
主 幹 寺田 修 (建設係長兼務)
主任主査 福島雅勝
主 査 石田和也
主任技師 村松豊史 小林克年
管理係主査 大野美鈴 (経理事務)

建設課長 佐野 泉 (平成18～19年度)
課長補佐 寺田 修 (平成18年度) 朝平 清 (平成19年度)
主 幹 朝平 清 (平成18年度) 松井一己 (平成18～19年度)
主任主査 福島雅勝 (平成18～19年度) 鈴木順子 (平成19年度)
主 査 鈴木順子 (平成18年度) 石田和也 (平成18～19年度)
山田 寛 (平成19年度)
主任 村松豊史 (平成18年度) 小林克年 (平成18～19年度)
技 師 松井 航 (平成18～19年度)

3 調査経過

平成17年8月29日

東工区において作業員による掘削開始。

平成17年10月12～14日

東工区掘削完了。写真撮影を行う。

平成17年11月25～30日

西工区掘削完了。写真撮影を行う。

平成17年12月5日

現地作業、片づけ作業完了。

平成18年7月4日

第1工区において作業員による掘削開始。

平成18年7月26日

第1工区掘削完了。写真撮影を行う。

平成18年9月20日

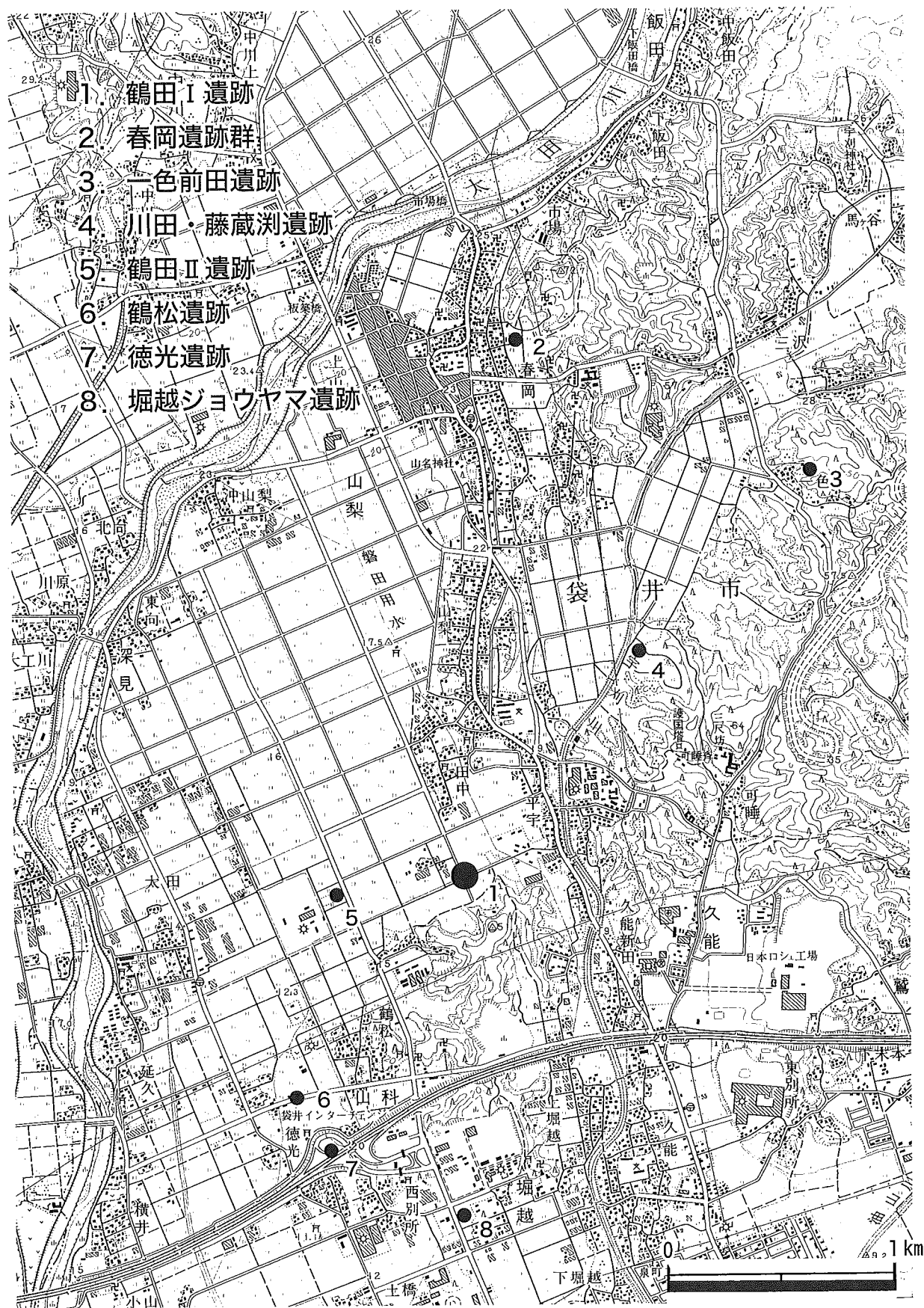
第2工区掘削完了。写真撮影を行う。

平成18年11月30日

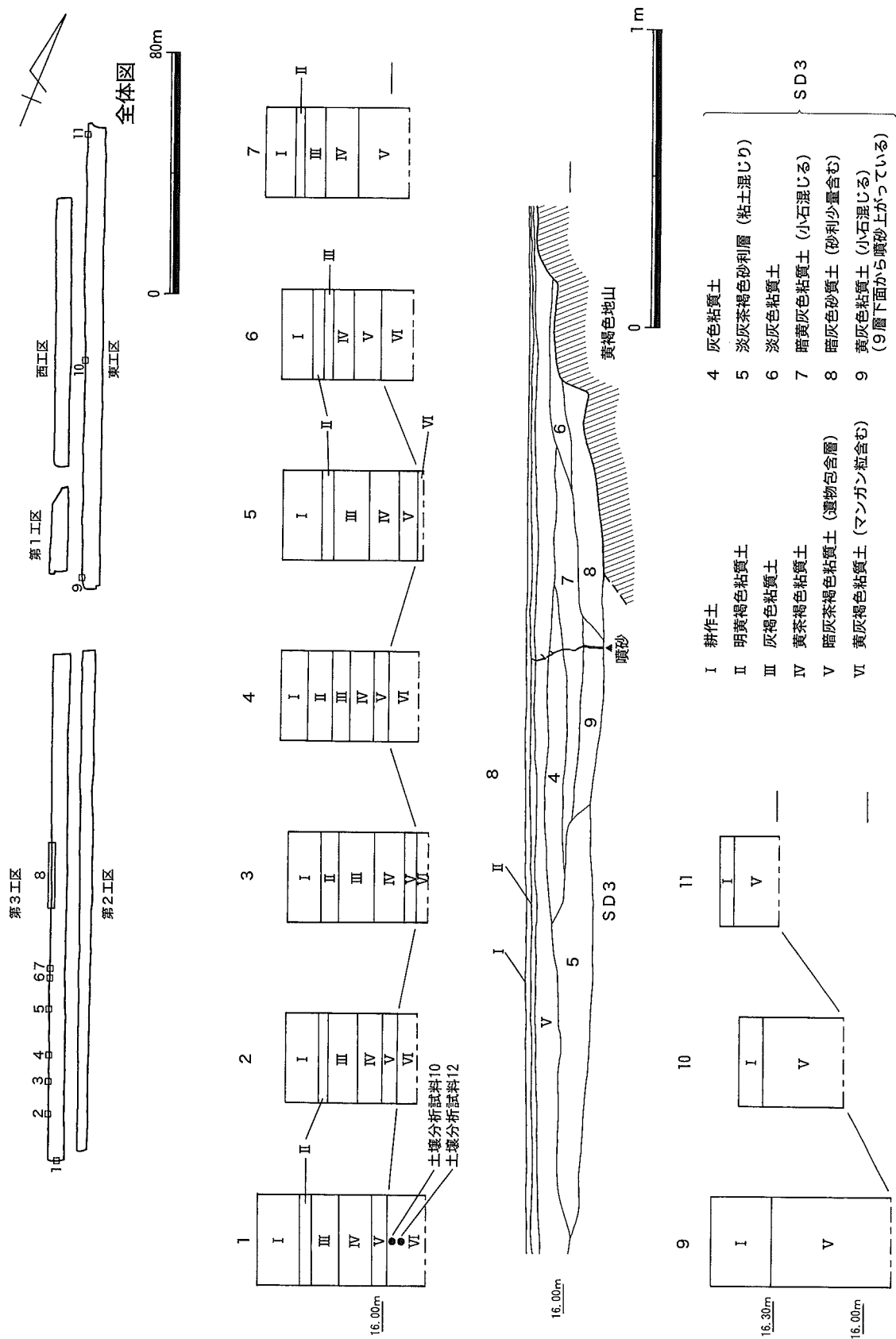
第3工区掘削完了。写真撮影を行う。

平成19年3月28日

本報告2分冊の内、『鶴田Ⅰ遺跡-遺構写真図版編-』を刊行する。



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)



第2図 東工区・第3工区土層図

第Ⅱ章 地理的・考古学的環境

鶴田Ⅰ遺跡（第1図1 本書）は、東名高速道路袋井インターチェンジの北東に位置し、北から西側にかけて太田川が流れている。太田川は、袋井市の北側に位置する森町から派生しており、大日山・春埜山を源流とする三倉川と吉川が合流したものである。太田川は途中、敷地川や原野谷川を集め、南に位置する遠州灘に注ぐ。鶴田Ⅰ遺跡と海の直線距離は11kmである。

太田川から派生した旧流路のうち、山梨地区から平宇地区へと伸びるものは顕著で、その両側には自然堤防が形成されており、鶴田Ⅰ遺跡もこうした条件下にある。

考古学的な所見で見ると、先に触れた太田川水系を中心に、弥生時代に集落の発展を見ることができる。鶴松遺跡（第1図6）は、弥生時代中期ごろより始まる拠点的な集落で、引き続き後期へと展開する。後期になると、鶴松遺跡周辺では、徳光遺跡（第1図7）や堀越ジョウヤマ遺跡（第1図8）など、微高地上に集落が形成される。徳光遺跡では、近年浄化槽の埋設工事に際してコウヤマキ製の木棺を検出しており、低地部における方形周溝墓の存在が予想される。また、堀越ジョウヤマ遺跡の発掘調査においては、集落を横断する溝（環濠か？）を検出するとともに、低地部では木製鋤や高床倉庫の部材などが出土した。更には、遺構的には確認できなかったものの、プラント・オパール分析によって水田の可能性が高いことが確認されている。

弥生中期の良好な水田跡は、春岡遺跡（第1図2）において、環濠に隣接して確認されており、農具や、建築部材が多数出土した。

一方、丘陵部においては、一色前田遺跡（第1図3）で弥生時代後期の竪穴住居と、これらを囲む東西の谷部に幅3～4m、長さ35mの大溝（環濠か？）が確認されている。

第Ⅲ章 基本層序

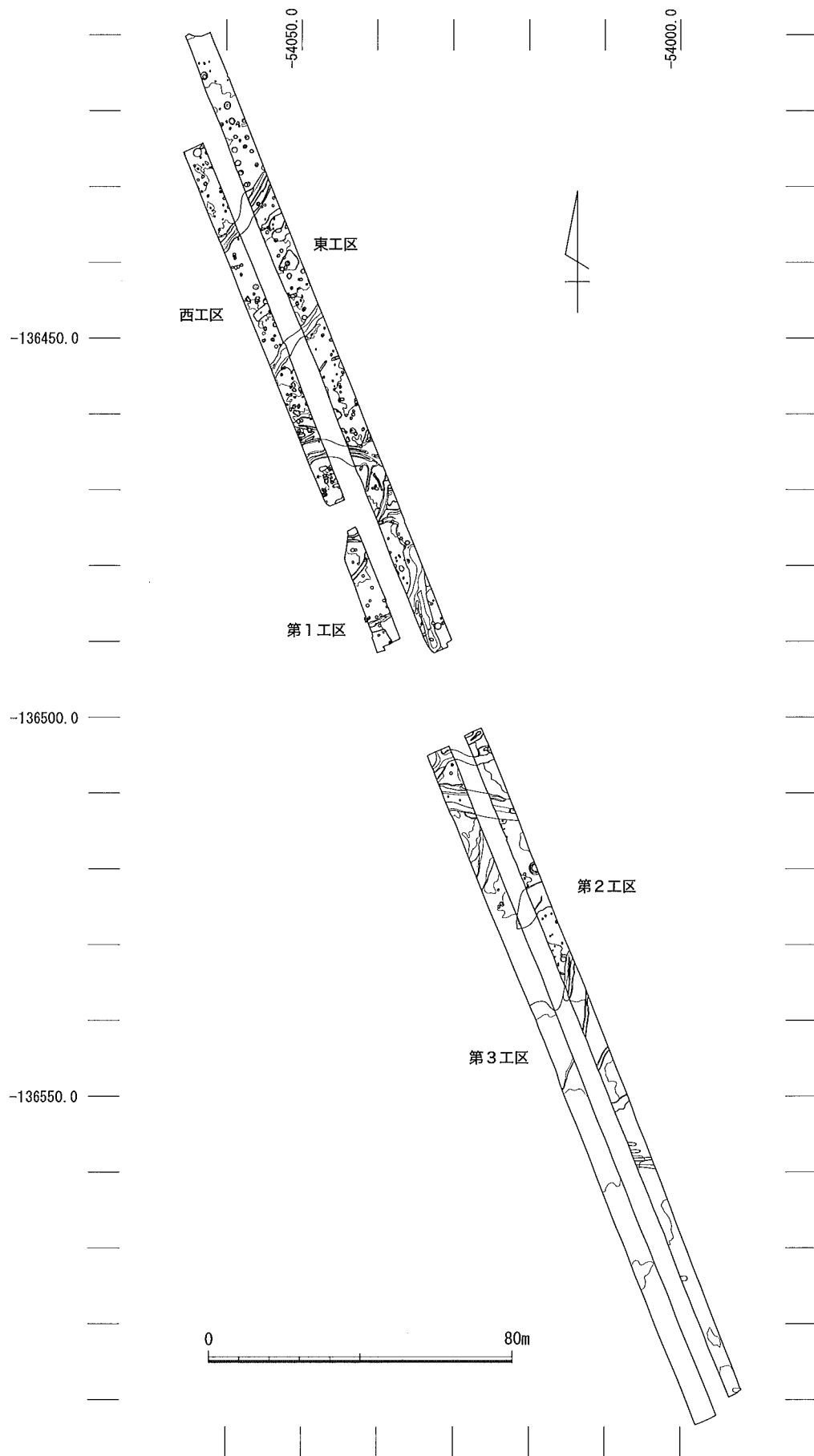
道路工事に伴う調査という特性上、南北に細長い調査区は、総延長390mを越えている。個々の土層については変化に富むが、概略、第2図の土層図に示した層序を示す。

調査区の北側に位置する東工区と西工区は、耕作土（第2図Ⅰ層）を除去すると、Ⅴ層の暗灰茶褐色粘質土が現れる。当該層は、遺物包含層であり、調査区の南に位置する第2・3工区においても、比較的安定的に確認できた。

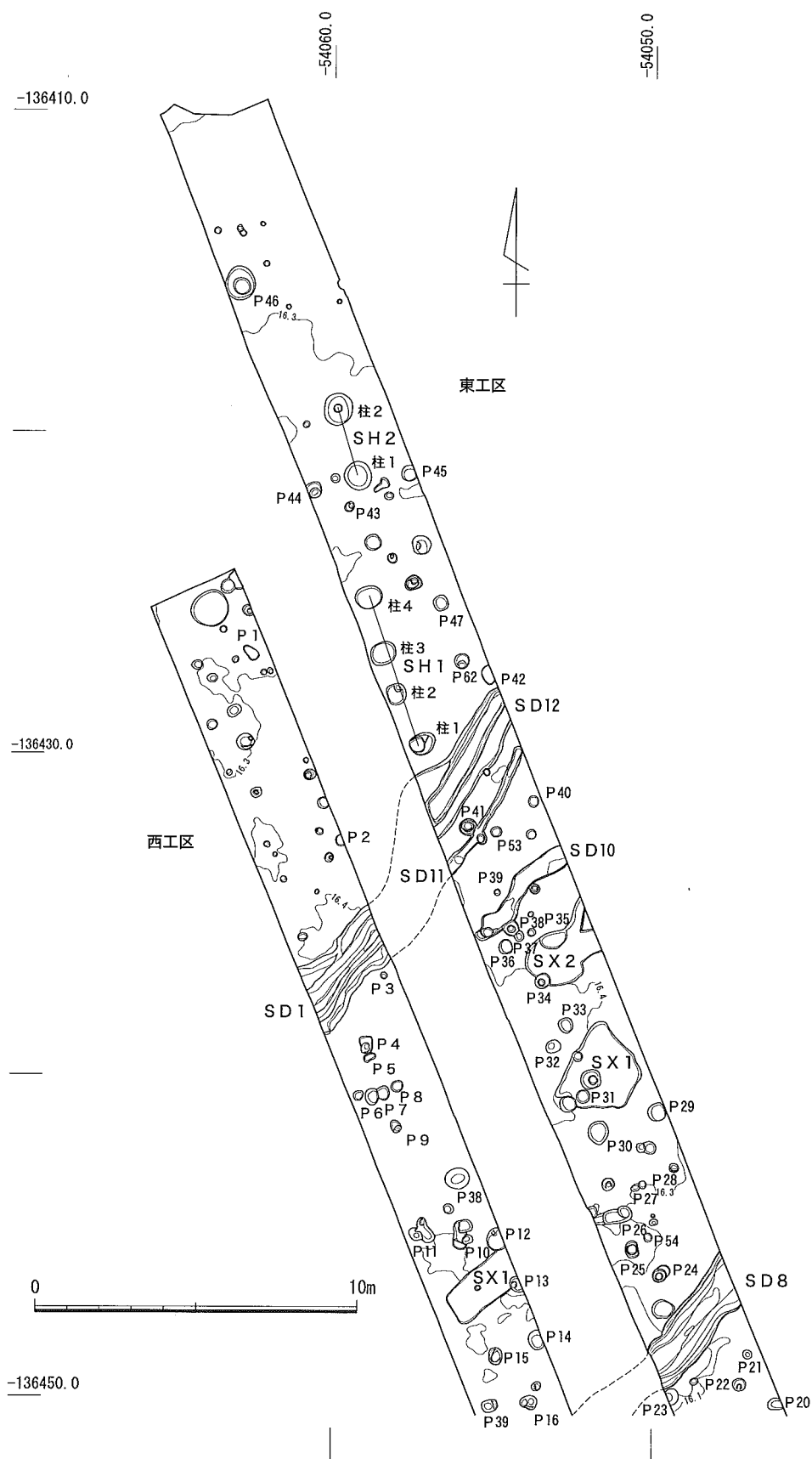
Ⅴ層直下は、Ⅵ層黄灰色粘質土でマンガン粒を含む層であり、当該層が今回の調査における、遺構確認面である。遺構面は、北から南にかけて緩やかに傾斜している。具体的には、東工区の北端で標高16.31m、第3工区の南端で標高15.88mであることから、その比高差は0.43mである。

調査区の東西幅が狭く、東西方向における遺構面の傾斜は、明確には捉えにくいだが、0.05～0.10m程度で東から西側に僅かに傾斜している。

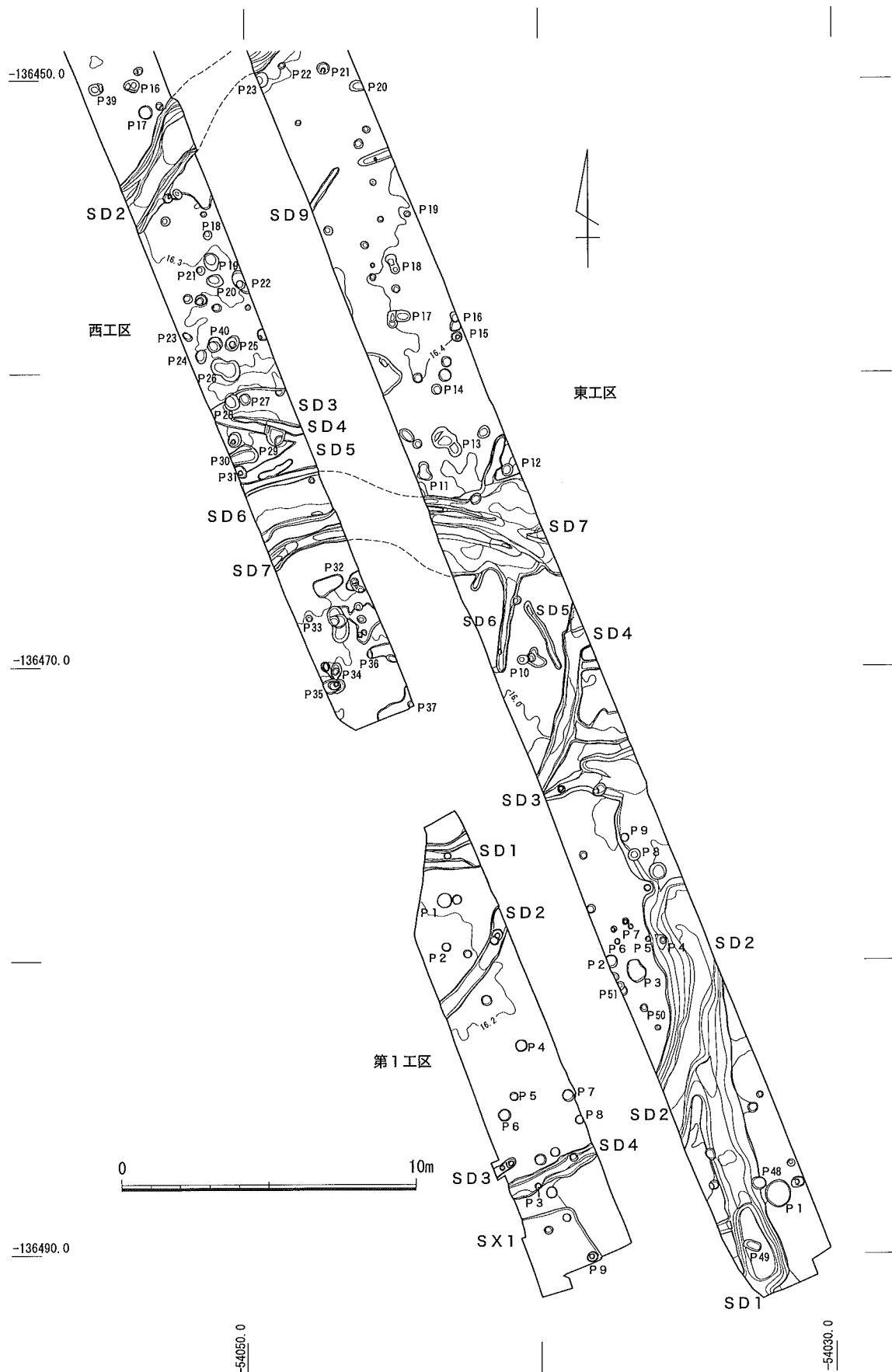
今回の調査においては、第2と第3調査区の南端に向かうに従い、遺構と土器の数が希薄となっていく。平面調査による遺構確認のための精査を繰り返したが、肉眼による土層の把握には限界があると判断されたため、第3工区の南側壁のⅥ層について、二箇所土層のサンプルを採取し、古環境の把握に努めた。詳細は、市道下山梨山科線改築工事に伴う『鶴田Ⅰ遺跡 一本文編一』2008年の、株式会社古環境研究所による考察に譲る。



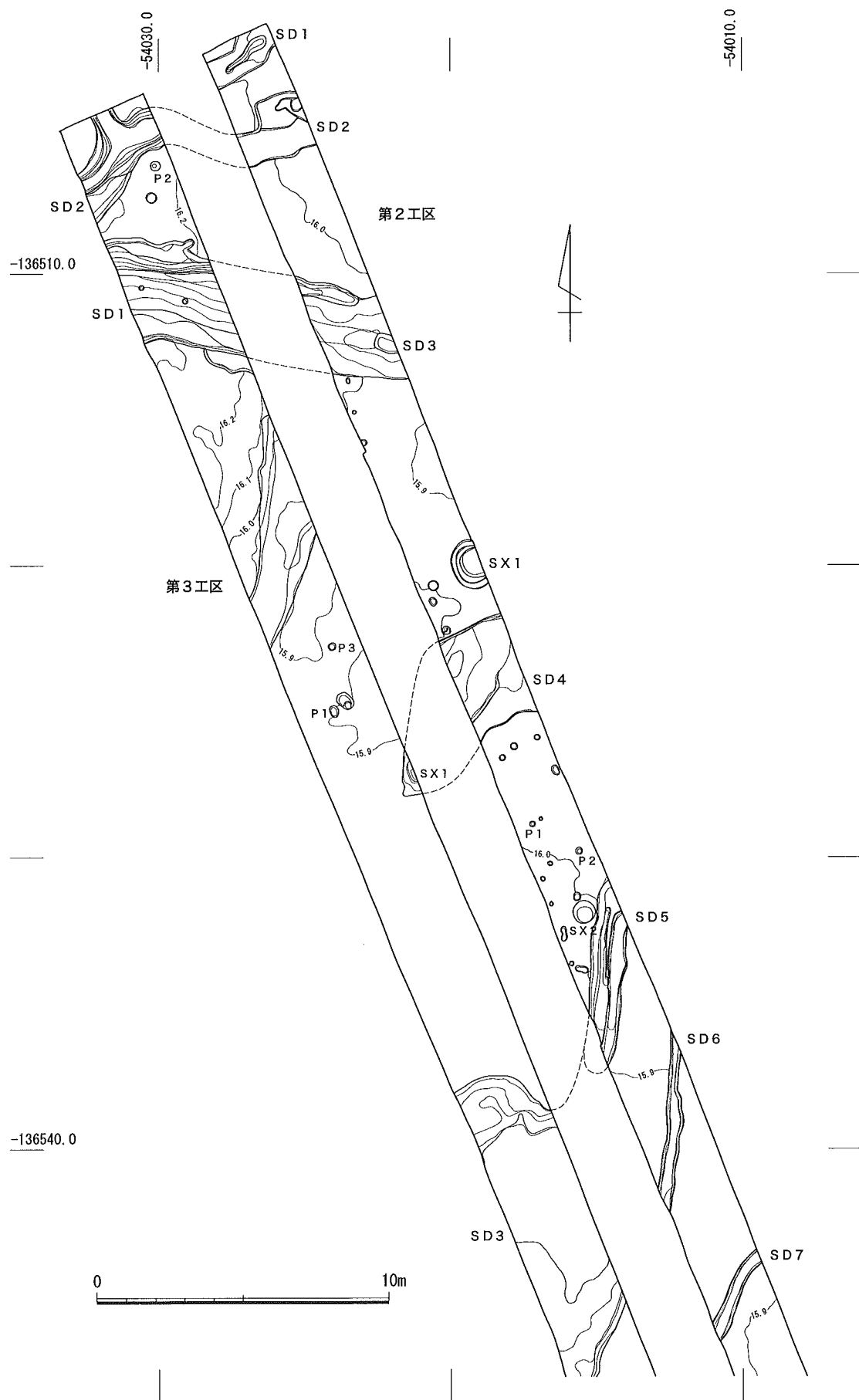
第3図 1 : 800全体図



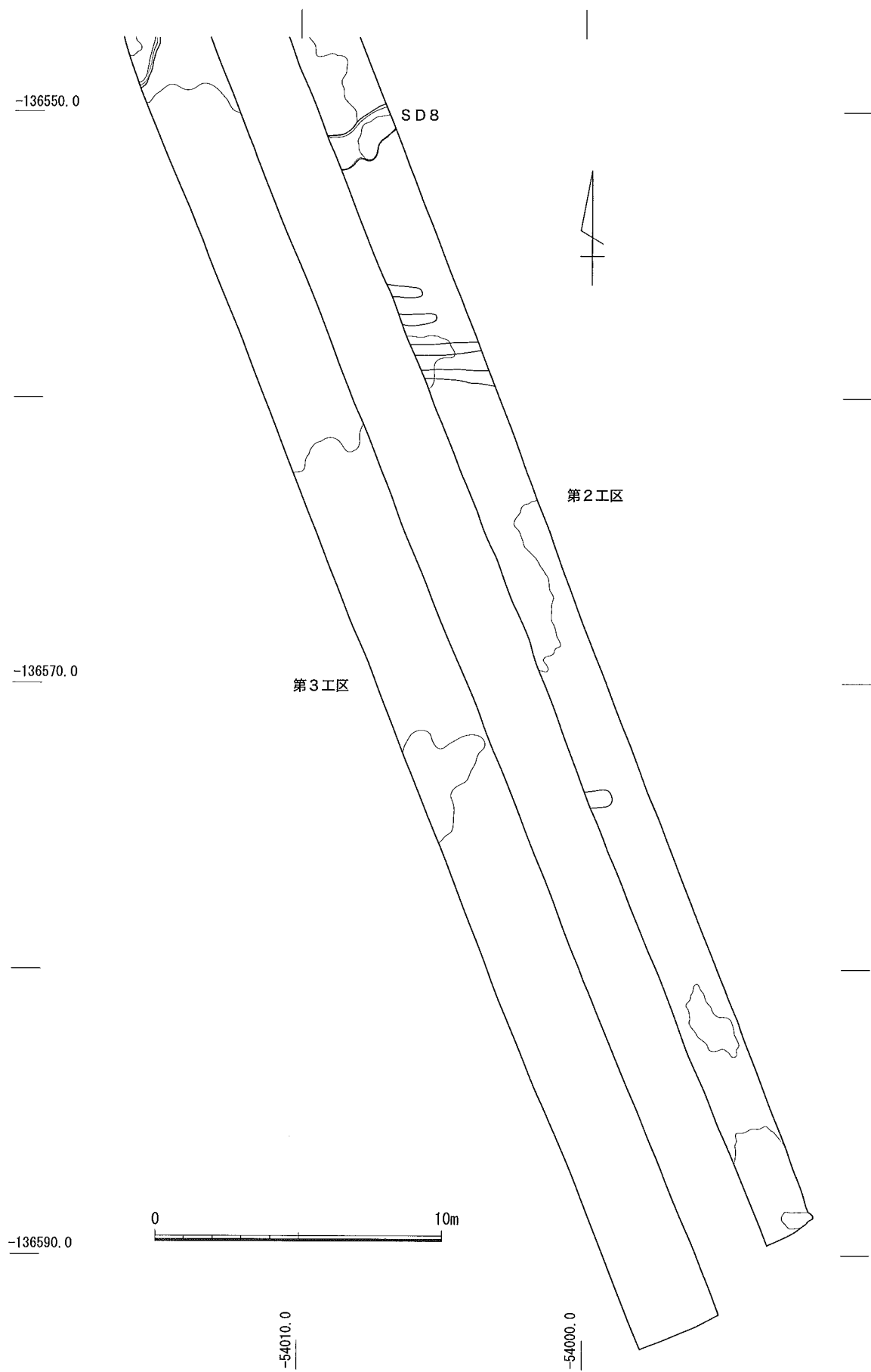
第4図 1 : 200遺構図 1



第5図 1:200遺構図 2



第6図 1 : 200遺構図 3



第7図 1 : 200 遺構図 4

第Ⅳ章 調査状況

1 地区の設定

先の「調査に至る経緯」で述べたように、当初計画では全面通行止めによる、ひとつの工区での調査を予定していたが、片側通行による計画変更を迫られたため、平成17年度には、東工区と西工区を設定し、発掘作業を実施した。道路中央には、水道管が埋設されており、道路工事に際しては、位置の変更を行わないことから、発掘に伴い当該部分に影響を与えないよう配慮したため、調査区の東西幅は3m前後と、大変狭いものとなった。

平成18年度には、前年度同様、片側通行での車輛の往来を確保しつつ、第1～3工区を設定し、番号の順序に従い調査を進めた。

2 遺 構【東工区】

a SD1 (第5図 遺構写真図版編：図版17)

東工区の南端に位置し、ほぼ南北方向へ直線的に伸びる溝である。幅は0.84～1.6mを測り、最深部の比高差は0.56mである。断面は、緩やかな弧状を呈する。

SD1の北端は、SD2と接しているが、平面・断面での観察からは、前後関係は確認できない。土器は、溝の埋土中から散在的に確認した(第14図1～6 写真図版1)。

b SD2 (第8図)

前述のSD1に一部接しながら、緩やかな弧状を呈する南北方向に伸びる溝である。北側では、SD3とも接しており、その平面形態は複雑である。平面・断面での観察からは、前後関係は確認できない。

幅は、1.20～1.92mで、最深部の比高差は0.47mである。断面の形状は、逆台形を呈する。

第8図に出土状態を示したように、溝底部付近から、土器がまとまって出土している(第14図7～10・第15図11～24 写真図版1・2)。

c SD3 (第5図)

東西方向に伸びる溝で、その東端は、SD2に接する。幅0.36～0.96mを測り、最深部の比高差0.25mである。断面は、Uの字状を呈する。

土器は、溝の埋土中から散在的に確認した(第15図25・26 写真図版2)。

d SD4 (第5図)

僅かに弧状を呈し、南北方向へ伸びる溝で、幅は0.48～1.52mを測り、最深部の比高差は0.26mである。断面は、Uの字状を呈する。

土器は、溝の埋土中から散在的に確認した(第15図27～32 写真図版2)。

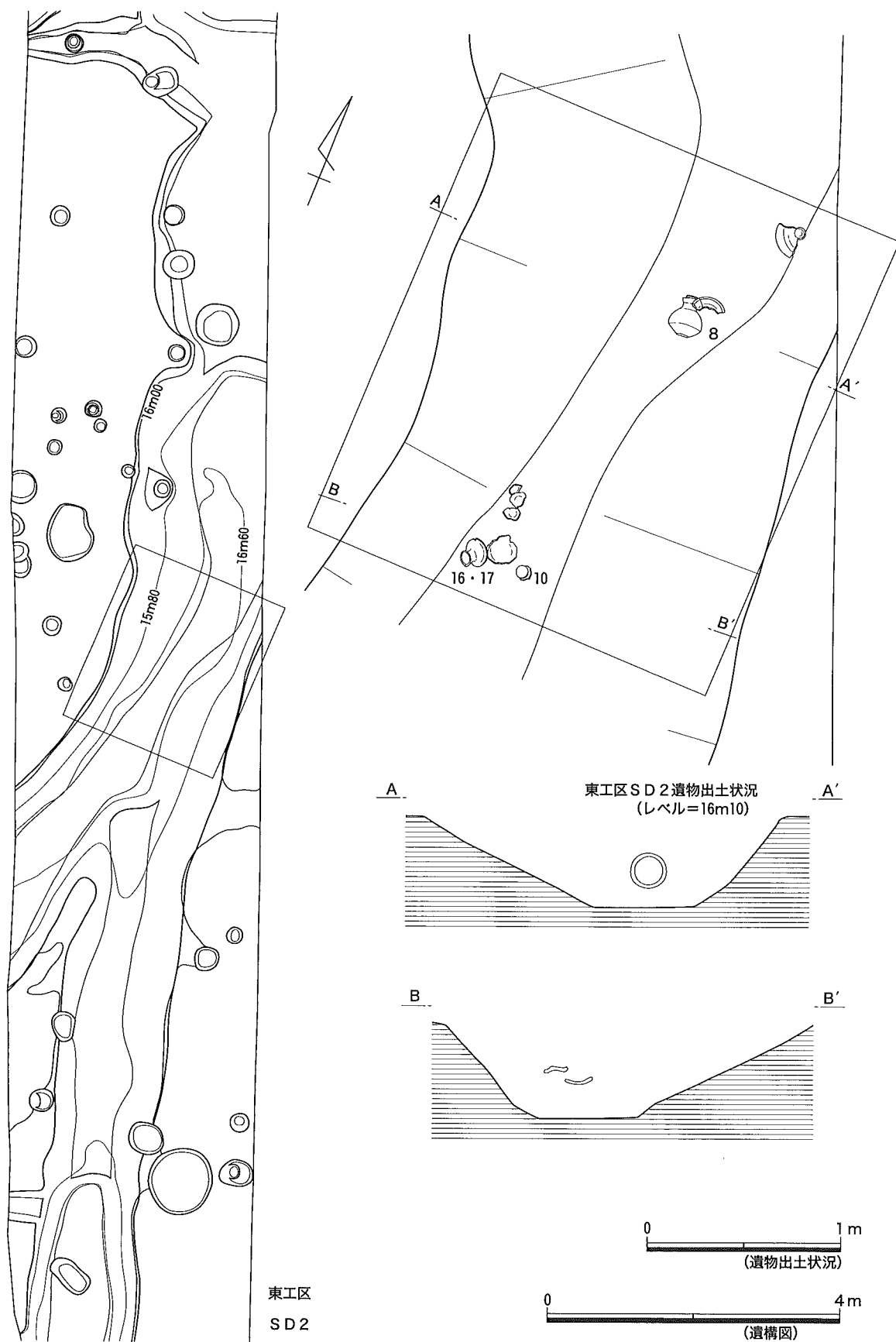
e SD6 (第5図)

南北方向に直線的に伸びる溝で、幅0.32～0.56mを測り、最深部の比高差は0.21mである。断面は、Uの字状を呈する。

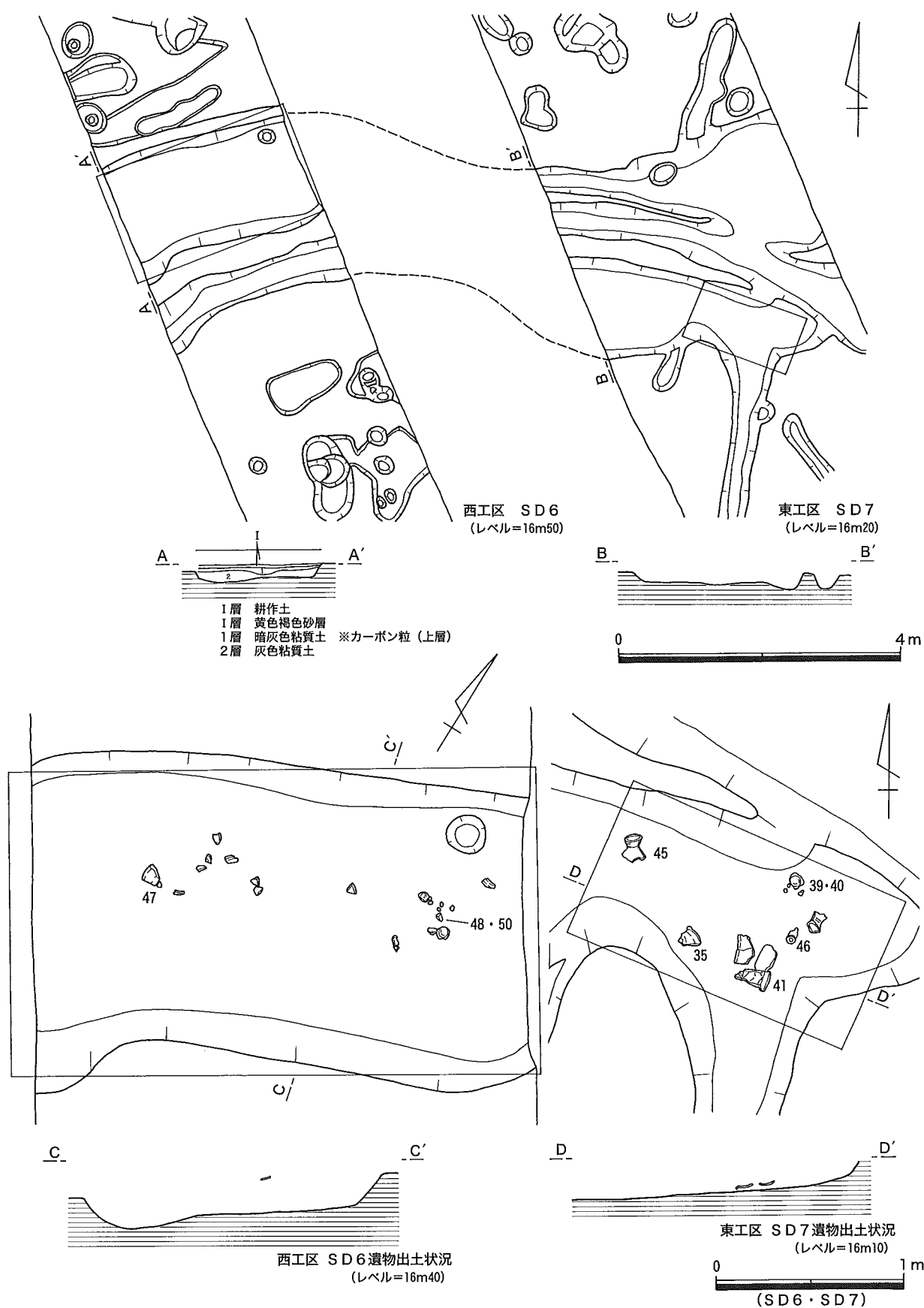
f SD7 (第9図 遺構写真図版編：図版23)

東西方向に伸びる溝で、幅2.96～3.36mを測り、最深部の比高差は0.31mである。溝の底部は比較的平坦である。SD6と接する部分で、土器のまとまりを確認した(第16図33～46)。

なおSD7は、その形状や位置関係から、西工区で検出したSD6と同一の溝である可能性が高い。



第8図 東工区SD2遺構・遺物出土状況実測図



第9図 東工区SD7/西工区SD6遺構・遺物出土状況実測図

g SD8 (第4図 遺構写真図版編：図版23)

東西方向に伸びる溝で、幅1.20～1.84mを測り、最深部の比高差は0.50mである。溝の断面は、Uの字状を呈する。

SD8の西側延長線上には、西工区のSD2が位置しており、形状や位置関係から、本来は同一の溝である可能性が高い。

h SD12 (第4図)

東工区内では、最も北側に位置する溝で、東西方向に伸びている。幅1.04～1.28mを測り、最深部の比高差は0.55mである。溝の断面は、Uの字状を呈する。

土器は、溝の埋土中から散在的に確認した(第17図57～59)。SD12の西側延長線上には、西工区のSD1が位置しており、形状や位置関係から、本来は同一の溝である可能性が高い。また、SD12の南岸には、平行してSD11が位置する。土層の観察からは、前後関係を確認できないが、位置関係から一体性のあるものと判断した。

i SH1 (第10図 遺構写真図版編：図版19～20)

前述の、SD12の北側に位置する柱穴群である。直線に南北方向に配置された3間分を検出したが、東西方向への広がり是不明である。柱穴間の距離は、柱1と柱2が1.80m、柱2と柱3が1.30m、柱3と柱4が1.80mである。

堀り方の直径は0.60～0.80mで、東西方向にかけて、僅かに楕円形を呈する平面形態である。深さは、0.17～0.36mである。SH1の内、柱2の堀り方からは、柱根(第23図130 写真図版8)を検出した。

j SH2 (第10図 遺構写真図版編：図版19～20)

SH1の北側で検出した柱穴である。SH1とほぼ同様に、南北方向に配置された1間分を検出した。柱穴間の距離は2.40mを測る。堀り方の直径は0.84～0.88mで、ほぼ正円の平面形態を呈する。深さは、0.43～0.55mである。

3 遺 構【西工区】

a SD1 (第11図 遺構写真図版編：図版25)

前述の東工区SD12と本来は同一の溝である可能性が高い。幅1.52～2.32m測る。最深部の比高差は0.22mで、溝の断面はVの字状を呈する。土器は、溝の埋土中から散在的に確認した(第18図66・67)。

b SD2 (第11図 遺構写真図版編：図版25・26)

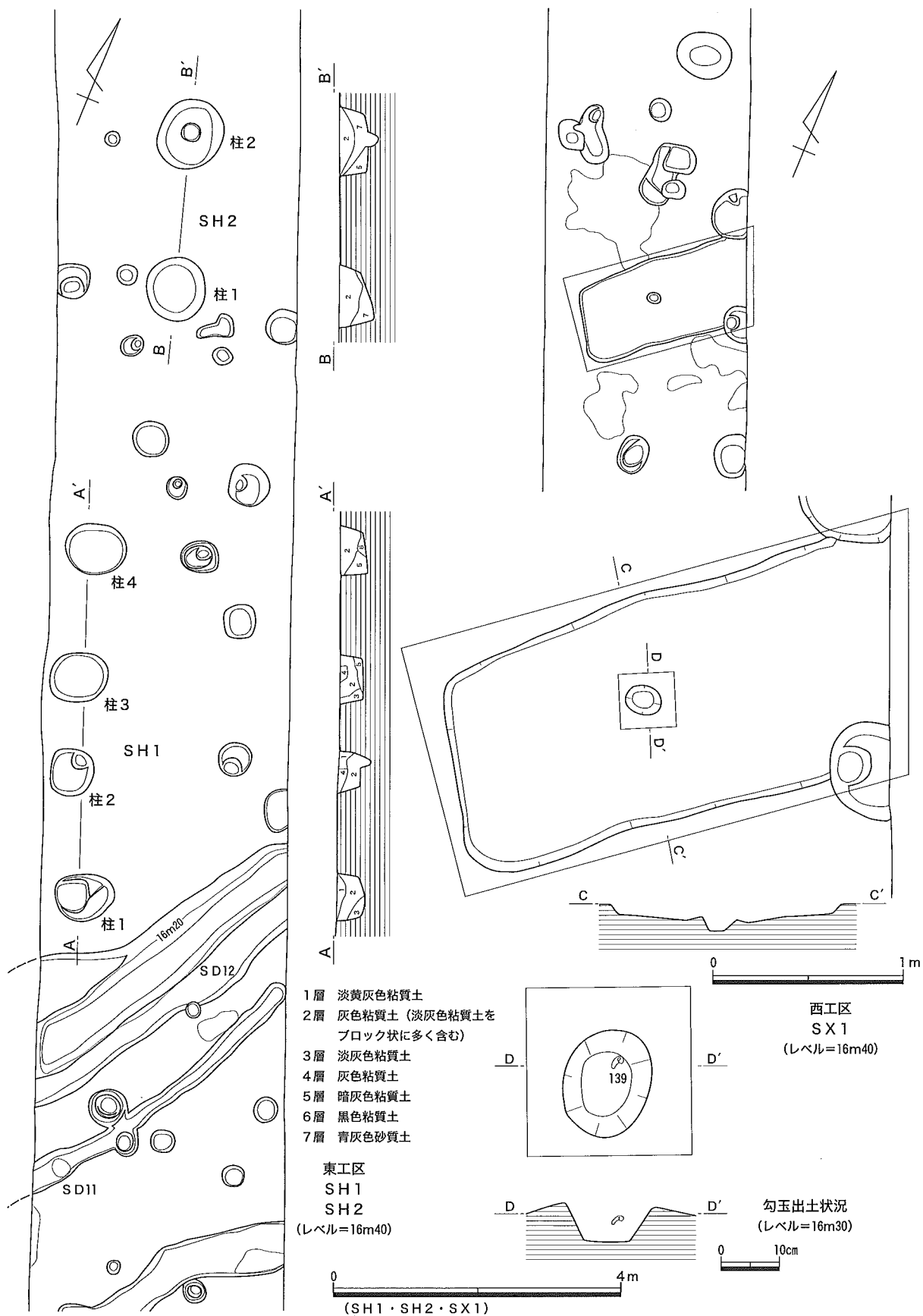
前述の東工区SD8に対応する溝である可能性が高い。幅1.44～2.08mを測る。最深部の比高差は0.70mで、溝の断面は逆台形を呈する。

土器は第11図に示したように、集中的に出土している。出土の高さには上下関係が見られ、溝上面近くから出土した上層出土土器(第18図68～74 写真図版4)と、下層から出土した土器(第18図75・76 第19図77～88 写真図版5)に分かれる。

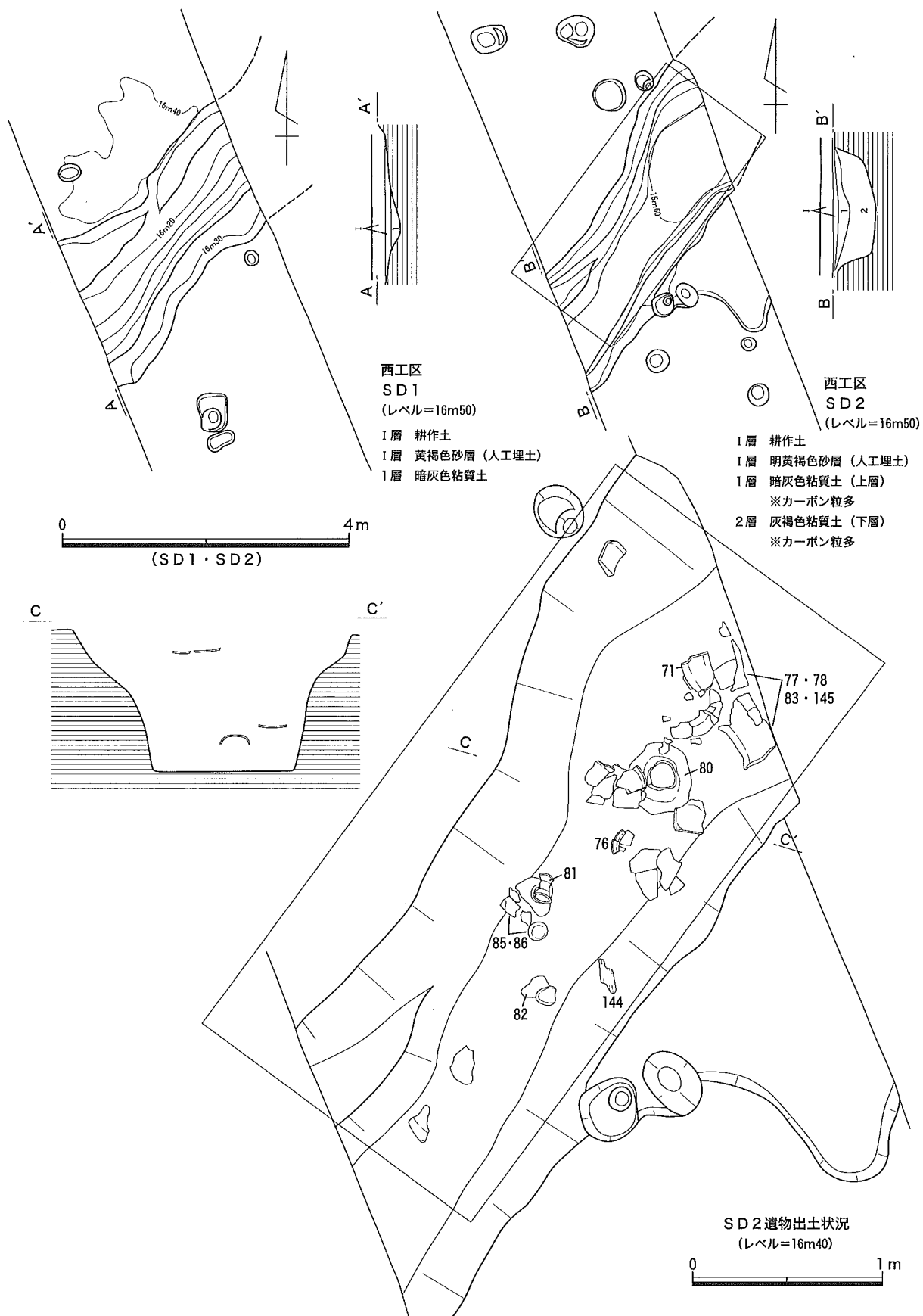
この下層土器に混ざって、木材が出土した(写真図版8 144・145)。土器との一括性が高いと判断したため、放射性炭素年代測定サンプルとして使用した。詳細は、市道下山梨山科線改築工事に伴う『鶴田I遺跡 一本文編一』2008年に譲る。

c SD6 (第9図 遺構写真図版編：図版27)

前述の東工区SD7と本来は同一の溝である可能性が高い。幅1.52～1.84m測る。最深部の比高差は0.32mで、溝の底面は比較的平坦である。平行するSD7も、一体のものである可能性が高い。遺物の多くは、下層から出土している(第16図 47～50 写真図版3)。



第10図 東工区SH1・2遺構実測図／西工区SX1遺構・勾玉出土状況実測図



第11図 西工区SD1・2遺構・遺物出土状況実測図

d SX1 (第10図 遺構写真図版編：図版6)

平面形態は長方形を呈するが、東端が調査区の制限で確認できていない。全長は長辺で2.36m以上、短辺で1.20mを測る。土坑の底面は、ほぼ平坦で、深さは0.15mを測る。

中央部には、直径0.20m、深さ0.05mの小穴があり、埋土中から瑠璃製の勾玉(第24図139 写真図版9：139)を検出した。収納箱などの有機質は、確認できなかった。

4 遺構【第1工区】

a SD1・2 (第5図 遺構写真図版編：図版31)

位置関係では、前述の東工区SD3やSD4に対応する可能性がある東西方向へ伸びる溝である。SD1の幅は0.88~1.28m、最深部の比高差は0.37mである。溝の断面は、円弧状を呈する。

SD2の幅は0.48~0.82m、最深部の比高差は0.40mである。溝の断面は、円弧状を呈する。

b SD4 (第12図 遺構写真図版編：図版8・32)

東西方向に伸びる溝で、幅0.48~0.72mを測り、最深部の比高差は0.56mである。溝の断面は、円弧状を呈する。

溝の南岸、溝底部から石斧(第24図140)を検出した。溝にほぼ平行に横たわり、刃部を東側に向けていた。意図的に配置されたものか、偶発的なものか、出土状態からはできなかった。

位置的には、東工区のSD2の延長上にあたり、本来同一の溝である可能もあるが、断定はできない。

c SX1 (第5図 遺構写真図版編：図版30)

平面形態が方形を呈する土坑である。全体の形状は、大半が調査区外であるため不明である。深さは、0.43mを測り、底部は緩やかに南に傾斜しているものの、全体的に平坦である。焼土や、硬化面は確認できなかった。

SX1内部からは、0.30m前後の小穴が3箇所確認でき、この内、南東隅のP-9は深さ0.31mである。小穴と、SX1の平面形態から判断すると、竪穴住居の一部である可能性が高い。

SX1(第20図100)とP-9(第20図97~99)の埋土から、それぞれ土器が出土している。

5 遺構【第2工区】

a SD2 (第6図 遺構写真図版編：図版33)

第2工区内では、北に位置する溝である。東西方向に伸びる溝であるが、幅が西側では1.20mであるのに対して、東側では2.24mと大きく広がっている。深さは0.24mを測り、溝の底部は平坦である。

溝の位置関係や規模から、第3工区のSD2と同一である可能性が高い。土器は、溝の埋土中より散在的に出土した(第20図 101・102 写真図版6)。

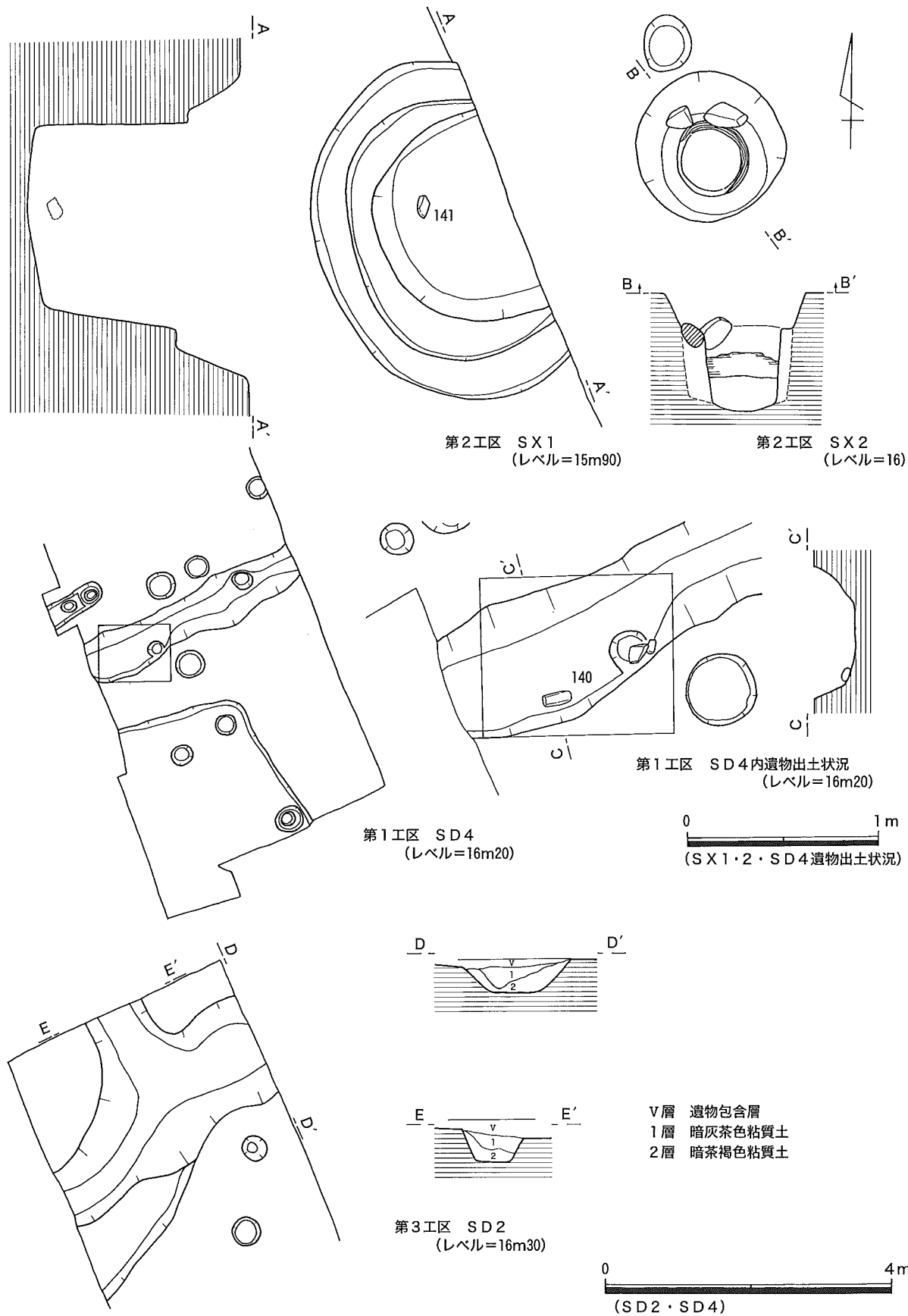
b SD3 (第6・13図 遺構写真図版編：図版11・34)

東西方向に直線的に伸びる溝である。幅は2.72~3.48mを測り、最深部の比高差は0.44mである。断面はVの字状を呈する。土器は、底部付近を中心に、比較的まとまって出土している(第21図 103~117 写真図版6)。第3工区のSD1と同一の溝である可能性が高い。

c SD4 (第6図 遺構写真図版編：図版33)

東西方向に直線的に伸びる溝である。幅は3.36~3.64mを測り、最深部の比高差は0.46mである。断面は緩やかな円弧状を呈する。土器は埋土内から散在的に出土した(第22図 118・119 写真図版7)。

第2工区内で見る限り溝であると判断しているが、第3工区のSX1と同一の遺構として見た場合、不成形の土坑の可能性もある。



第12図 第1工区SD4/第2工区SX1・2/第3工区SD2 遺構・遺物出土状況実測図

d SD5・6 (第6図 遺構写真図版編：図版34)

SD5は、幅1.28mを測る南北方向へ伸びる溝である。最深部の比高差は0.21m、断面の形状は、Uの字状を呈する。南側に位置するSD6は、幅0.32～0.56mを測り、最深部の比高差は0.20mである。この両者は、方向的にも平行関係にあり、溝間には砂利の堆積が確認できた。但し、狭小な調査区という条件の中では、この砂利層がSD5からSD6にかけての幅広の堆積土という認識はなく、砂利層内からも土器は確認できなかった。

その後、西側に位置する第3工区のSD3の調査において、砂利層内から、土器が出土したことにより、埋土であるとの判断を行った。SD5の埋土内から散在的に土器が出土した(第22図 120～123)。

e SX1 (第12図 遺構写真図版編：図版12・35)

前述のSD4の北側に位置する土坑である。調査区の制限によって、全容は把握出来ないが、ほぼ正円の平面形態の直径は1.68m、深さは1.65mである。断面は、すり鉢状に開く上半部と、垂直な壁の下半部による二段構造となっている。底部は平坦である。形状から井戸の可能性が高いが、木材・石材による補強は認められなかった。

底部付近から、石斧を検出したが(第24図141 写真図版9)、後世に偶発的に転落したか、廃棄された可能性が高い。

f SX2 (第12図 遺構写真図版編：図版12・35)

ほぼ正円の平面形態の掘り方直径は0.80mで、深さは0.65mである。断面はすり鉢状に上部へ開く形状で、底部は平坦である。

内部には直径0.45mの木材の曲げ枠が僅かに残存していた。木材の材質は不明である。

6 遺 構【第3工区】

a SD1 (第13図 遺構写真図版編：図版38～40)

前述の第2工区SD3に対応する溝である可能性が高く、東西方向へ直線的に伸びている。幅3.52～3.84mで、今回の溝の中では最大幅である。最深部の比高差は0.67mである。断面はVの字状を呈する。遺物は、溝の上層を中心にまとまって出土しており、土器(第22図124～129 写真図版7)と、石斧(第24図142 写真図版9)が確認できた。

b SD3 (第6図 遺構写真図版編：図版15・37)

前述したとおり、第2工区の調査において、全容を把握しきれていなかったSD5とSD6は、堆積土中に砂利や小石を多く含む溝(SD3)として確認できた(第2図)。断面は円弧状を呈する。第3工区内での状況からは、人工的な掘削溝よりは、自然流路である可能性が高い。

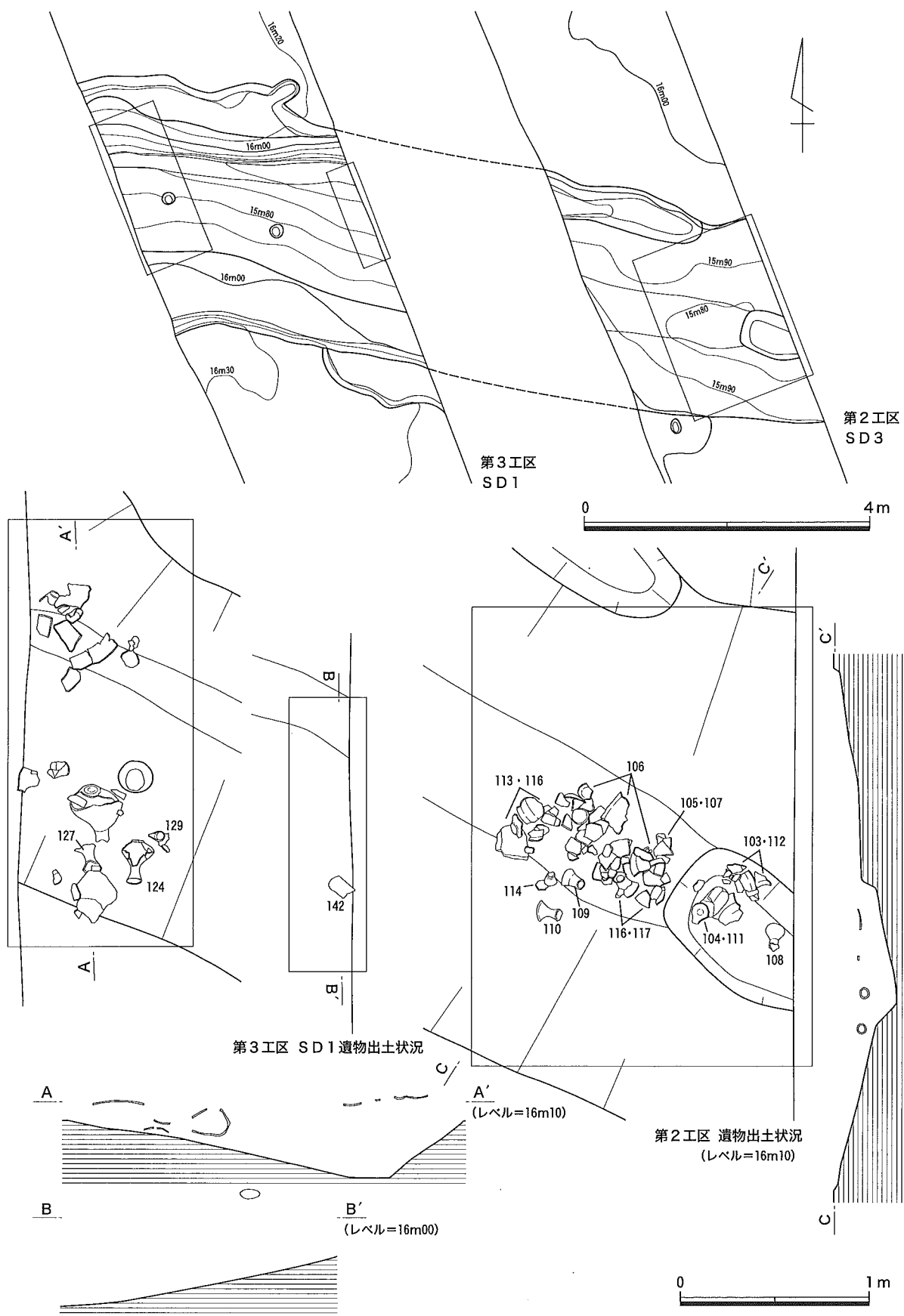
c 噴 砂 (第2図 遺構写真図版編：図版16・40)

第3工区のSD3では、堆積土の西側土層断面において、溝底面から各堆積土を貫き、基本土層のⅡ層(明黄褐色粘質土)上面まで達する「噴砂」を確認した。

「噴砂」の幅は、下部では0.02～0.03m程度であるが、上部の末端では0.005m前後と、非常に細く、砂質も細かい。

基本土層のⅡ層上面は、耕作土であるⅠ層になっており、耕作土による攪拌を受けている可能性があり、基本的には現代の地表面近くまで「噴砂」が到達していたと見て良い。明確に断面として捉えられたのは、この第3工区のSD3内だけで、その他では確認できなかった。

こうした状況は、SD3の周辺に局部的に、砂や砂利が堆積しており、その上に粘土質の堆積土層が覆っており、当該地が「噴砂」の発生しやすい条件であったものと判断できる。



第13図 第2工区SD3／第3工区SD1遺構・遺物出土状況実測図

7 遺物【土器】

道路工事に伴う調査のため、南北に細長い調査区であるうえに、東西方向も幅狭で、中央を分断されていることから、遺構の把握が非常に難しかった。

前節の遺構の説明でも述べたように、位置関係や規模を基に、同一性の高いものを中心に、遺物がまとまって出土した遺構の土器の概略を以下で記す。

a 東工区SD1（第14図1～6 写真図版1）

第14図1は、外面調整に荒い条痕を横位に施しており、口縁は折り返した後、押圧を加えている。口縁部内面には、ナデの調整が僅かに確認できる。破片資料のため、底部を中心とした形状は不明である。

第14図2～6は、壺の破片である。2～3は、胴部の破片で、2では沈線の間を斜方向への縄文を施している。3では肩部に凸帯を付し、その上下に鋸歯状文を配している。4は受け口状の口縁の一部と考えられ、外面に鋸歯状文を施している。

b 東工区SD3（第15図25～26 写真図版2）

第15図25・26は、壺の破片である。25は単純口縁で、口縁の外面に僅かに押圧を加えている。26は壺の胴部で、Uの字の沈線を施している。

c 東工区SD8（第17図51～56 写真図版4）

西工区SD2（第18図68～76 第19図77～88 写真図版4・5）

東工区のSD8と、西工区のSD2は同一遺構の可能性が高い。第17図の51は甕の破片で、口縁部付近には、斜め方向のハケを施し、胴部あたりでは斜め方向と、縦方向を交差させている。口縁端部にキザミはない。52は受口状の口縁を持つ壺の破片で、外面には楕円などをあしらった沈線が付されており、受け口は、口縁端部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。56は高坏の坏部から脚部への境目の破片である。外面には所謂「櫛描羽状文」を施している。

西工区のSD2は、遺構の説明でも述べたように、土器の出土状態や堆積土の観察から、上下二層に分かれていることが確認できている。

上層出土土器…第18図68～74

下層出土土器…第18図75～76・第19図77～88

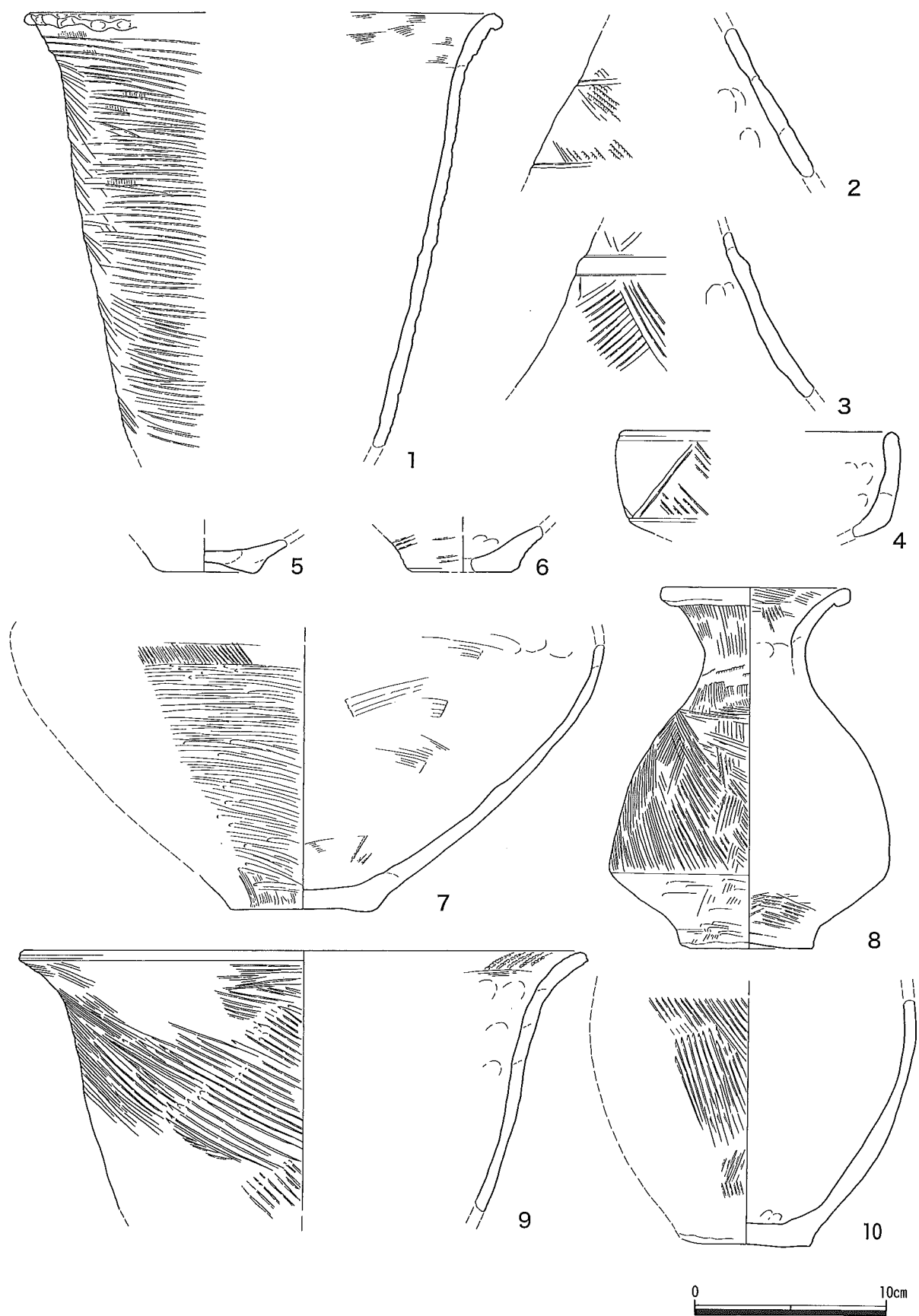
上層出土土器では、第18図68から72に見られるように甕の破片が多い。口縁端部の調整は68に、僅かなキザミが施され、69には押圧が見られる。73は受け口状口縁の壺の破片で、口縁端部へ、垂直に伸びるが、立ち上がりは僅かである。

下層出土土器は、第19図の81から84に特徴的な壺の頸部付近の破片がある。81では、頸上部に、円形の押圧文を付し、三条の沈線の下面には、三角形を呈した五条以上の沈線を施している。さらに、この下部には、縦方向へのハケの後、方形の沈線による区画内部に、横方向へ多条の沈線を配している。

82では、81と同様に円形の押圧文を施した下部に、三条の沈線が巡るが、この沈線内に縦方向への細かなキザミが施されている。表面の一部に赤彩の痕跡が残る。83では、三条の沈線間の最下段に、爪形のキザミが施されている。胴部中央には円形の浮文を配し、両側には横位への沈線を四条施している。

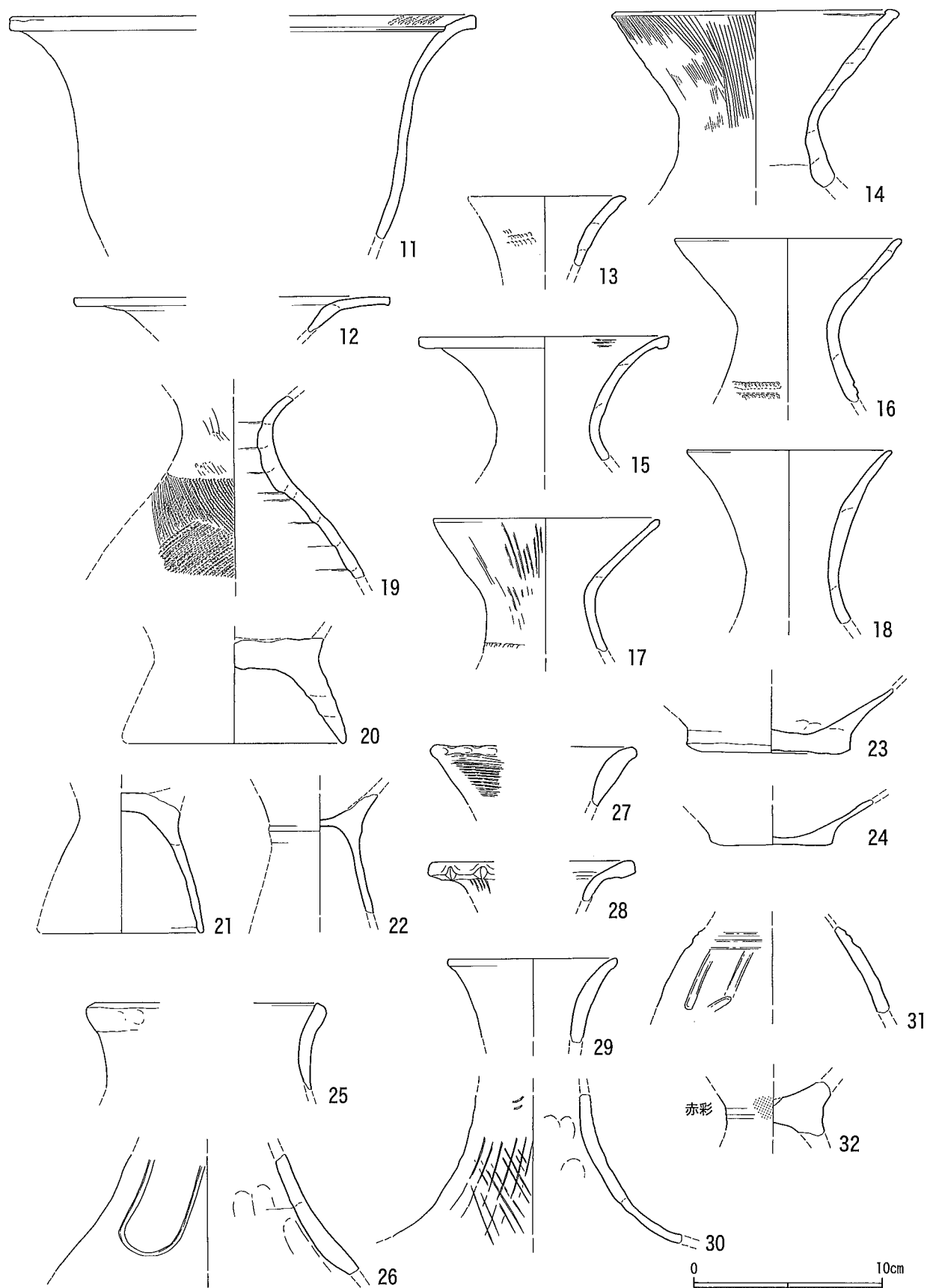
77から80は甕の破片である。底部は欠損しており不明であるが、外面の調整は斜め方向への条痕を基本としている。77の口縁内面には、櫛状工具による横位への調整痕が僅かに残る。

85は台付鉢形甕の脚である。松井一明氏が指摘するように〔袋井市教委2003〕、嶺田式段階で台付鉢形甕が出現していることを示す資料である。



0 10cm
 1~6=東工区SD1
 7~10=東工区SD2

第14図 土器実測図1

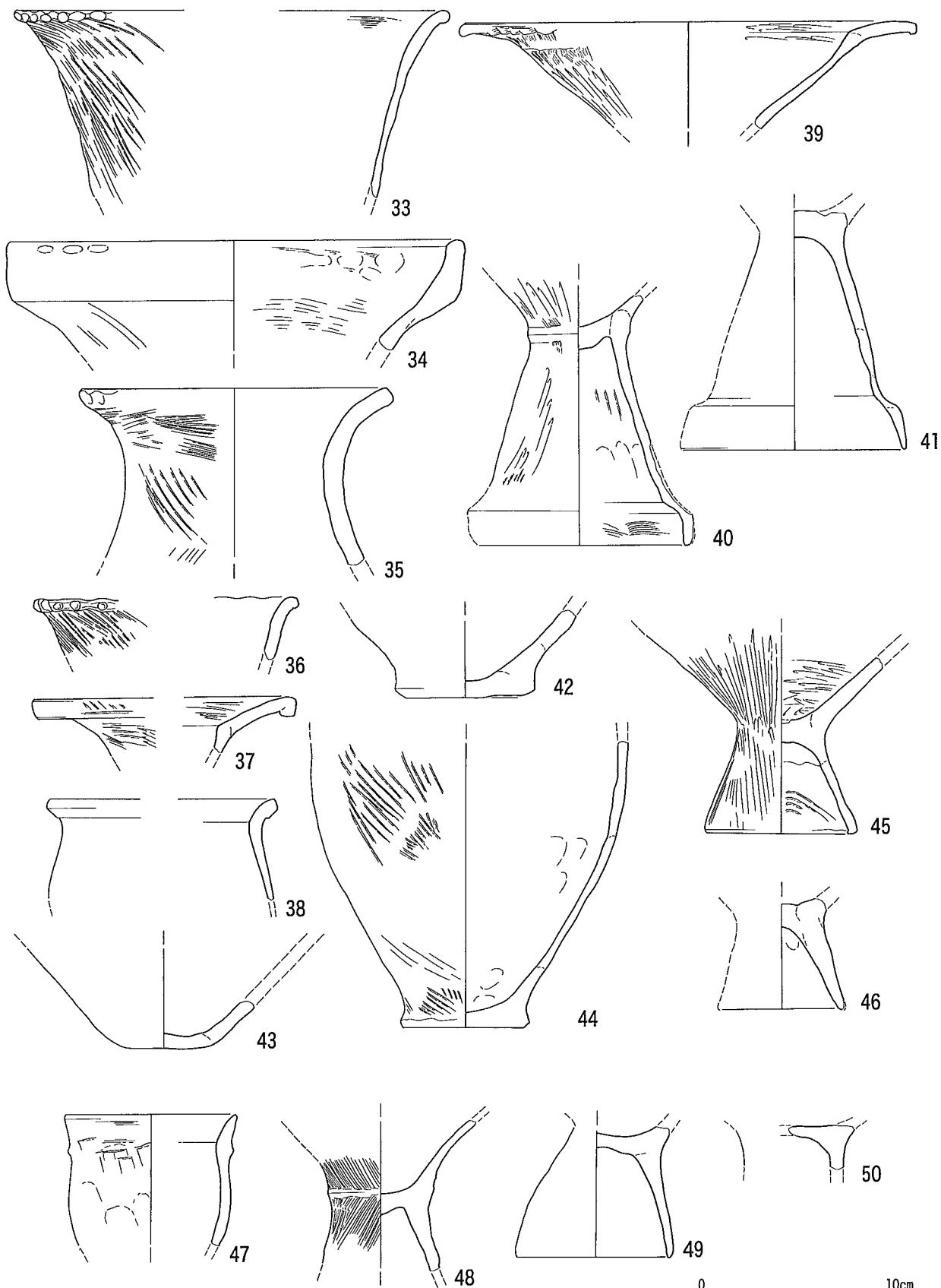


第15図 土器実測図2

11~24=東工区SD2

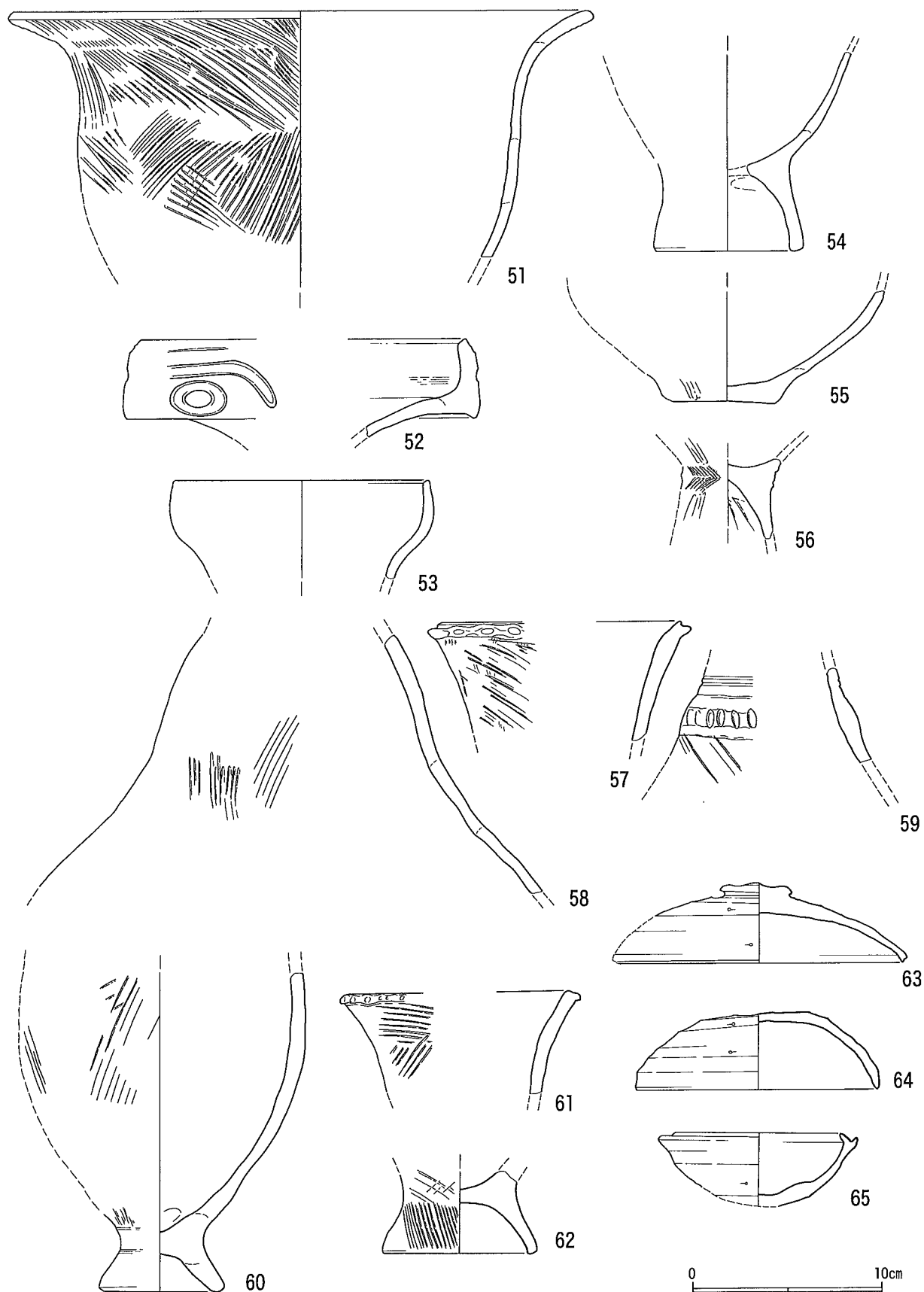
25・26=東工区SD3

27~32=東工区SD4



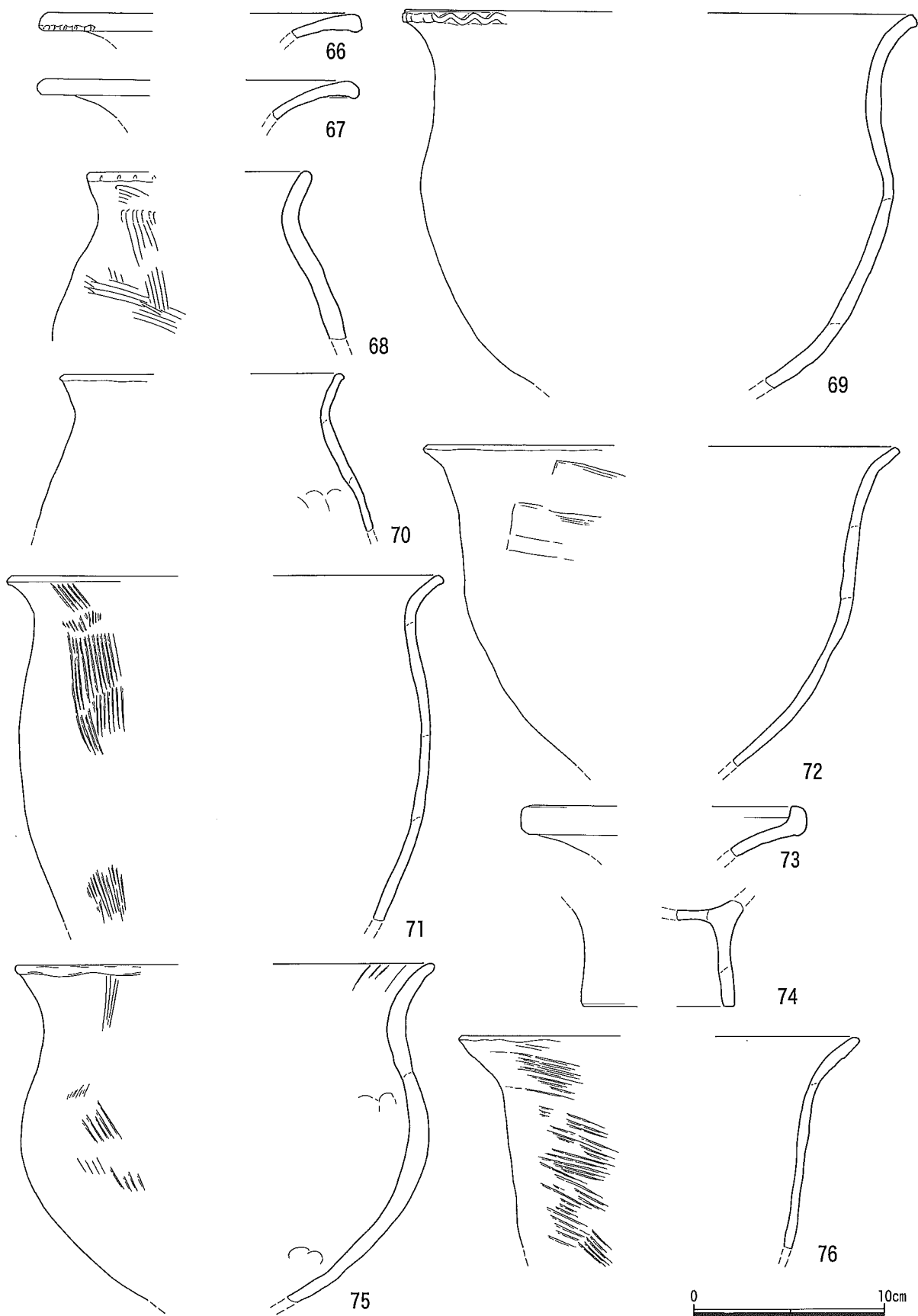
33~46=東工区SD 7
47~50=西工区SD 6

第16図 土器実測図3



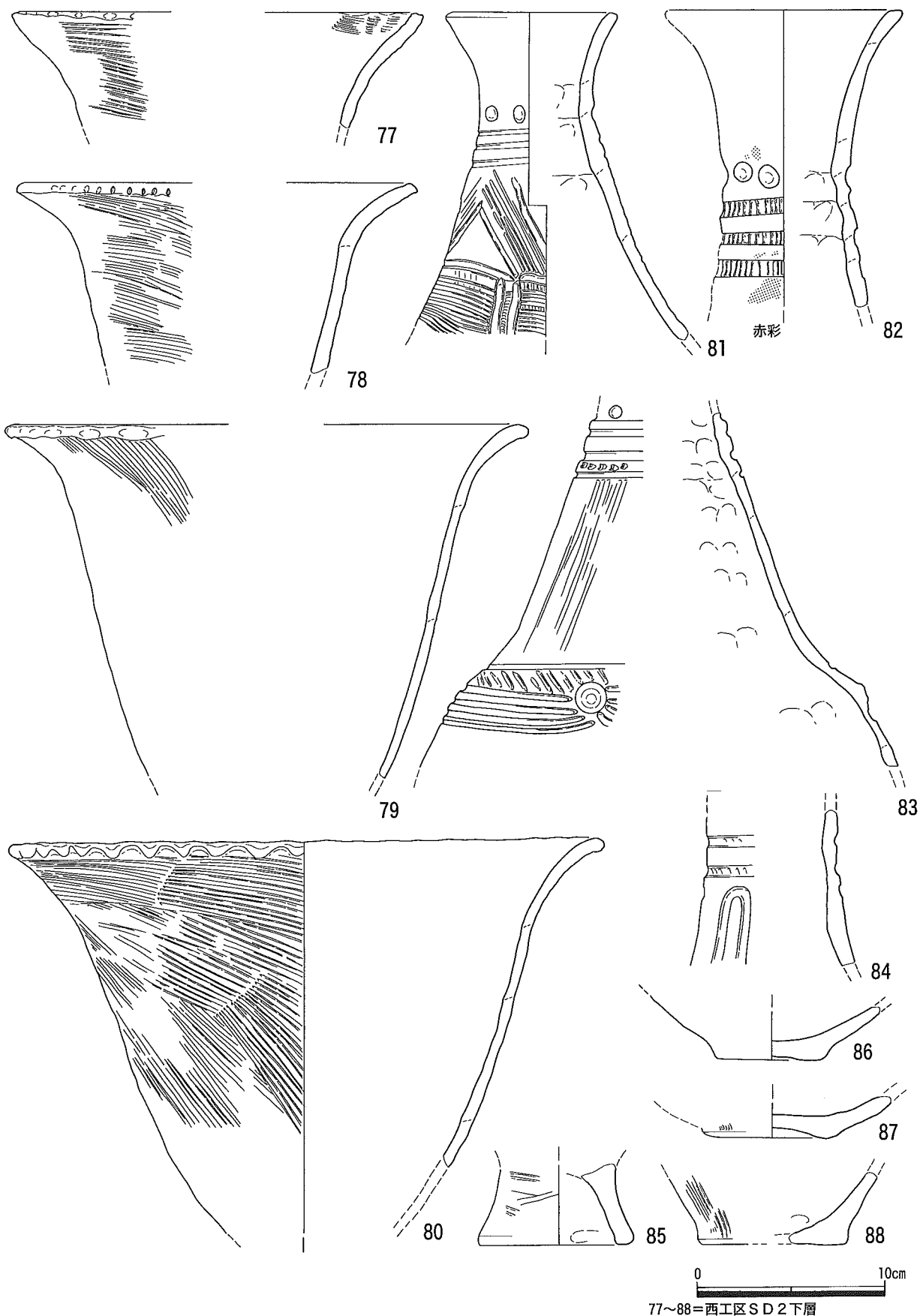
第17図 土器実測図4

51~56=東工区SD8 62=東工区P-5
 57~59=東工区SD12 63・64=東工区包含層
 60・61=東工区P-2 65=東工区P-43

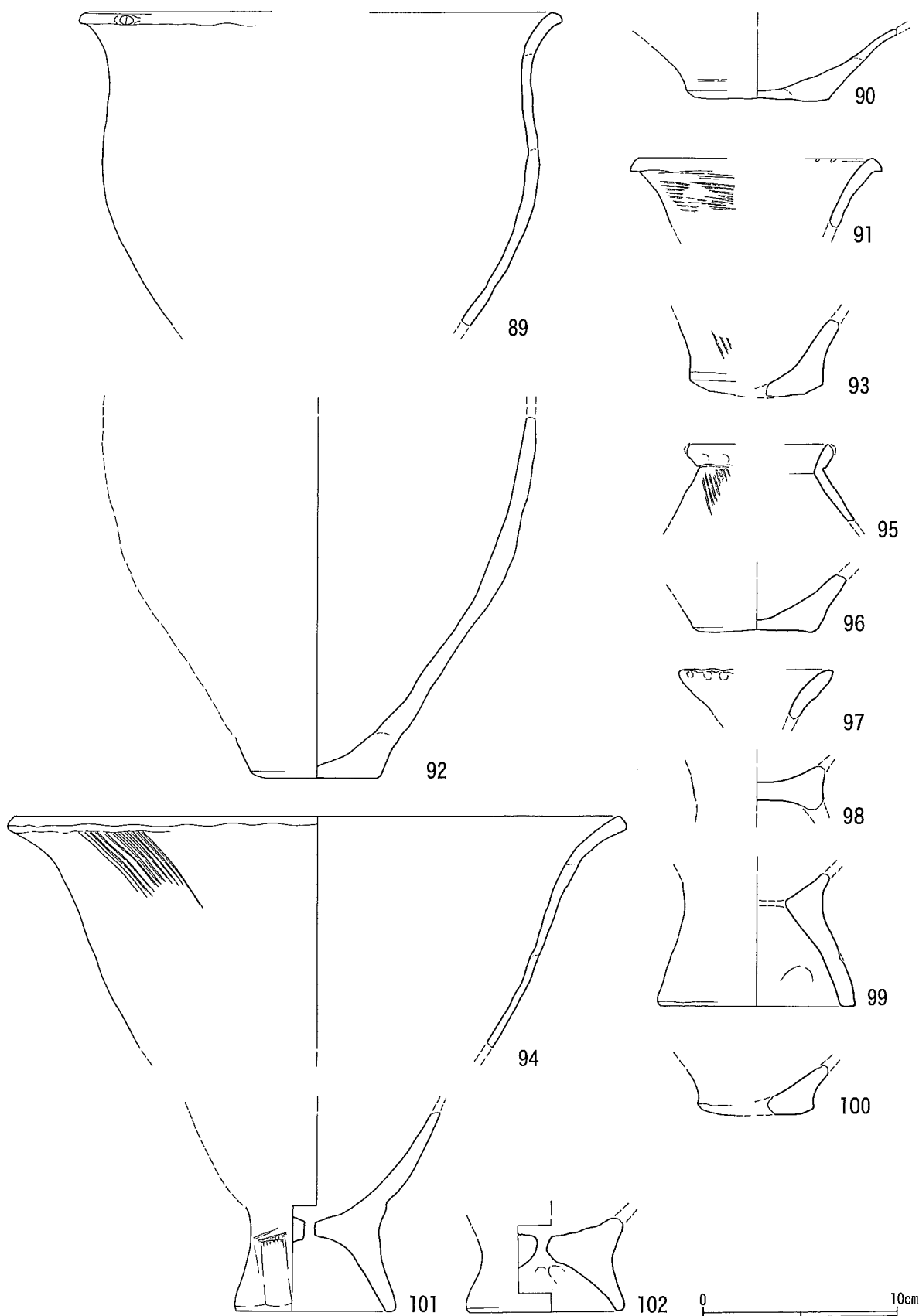


第18図 土器実測図5

66・67=西工区SD1
68~74=西工区SD2上層
75・76=西工区SD2下層

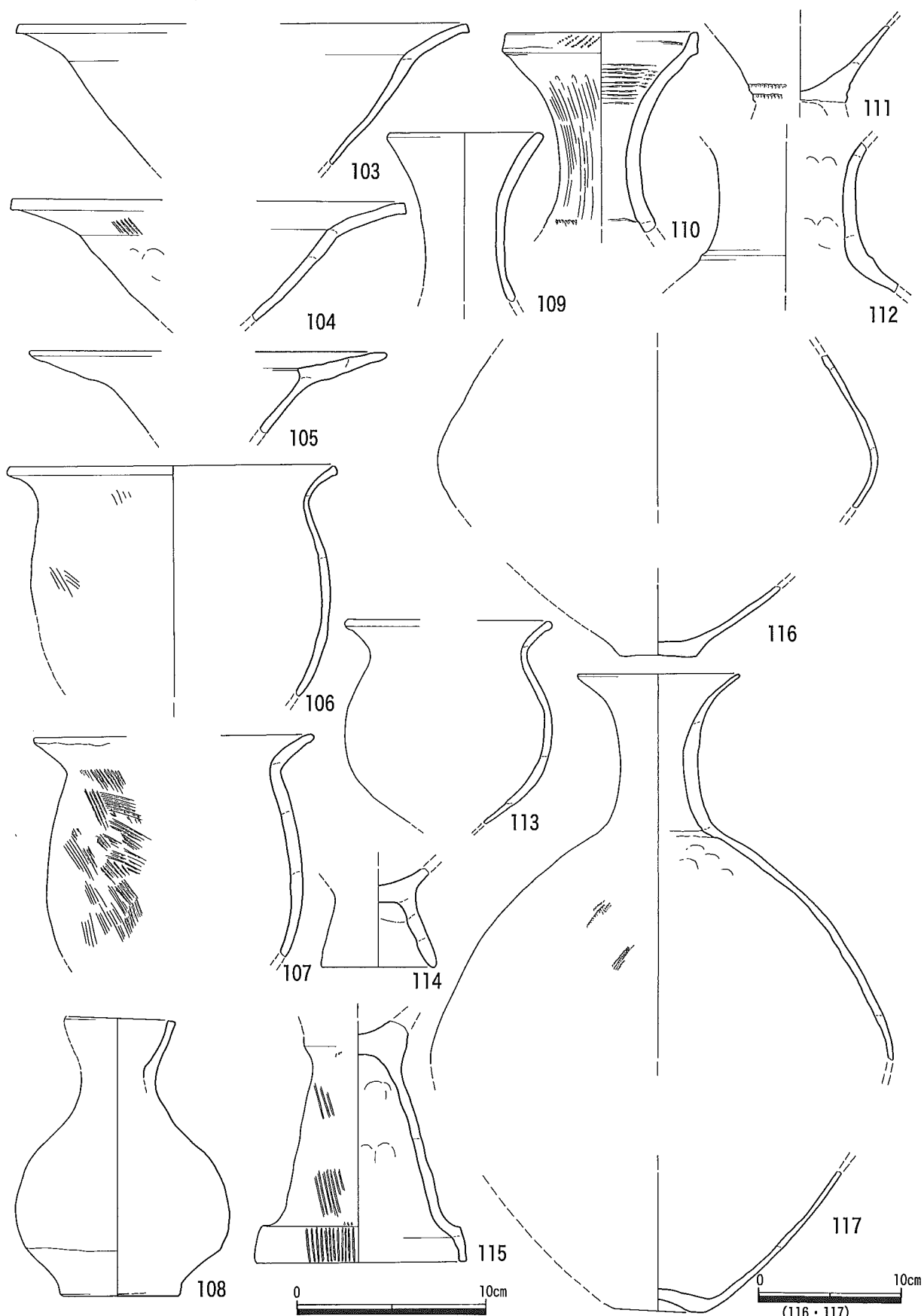


第19図 土器実測図6



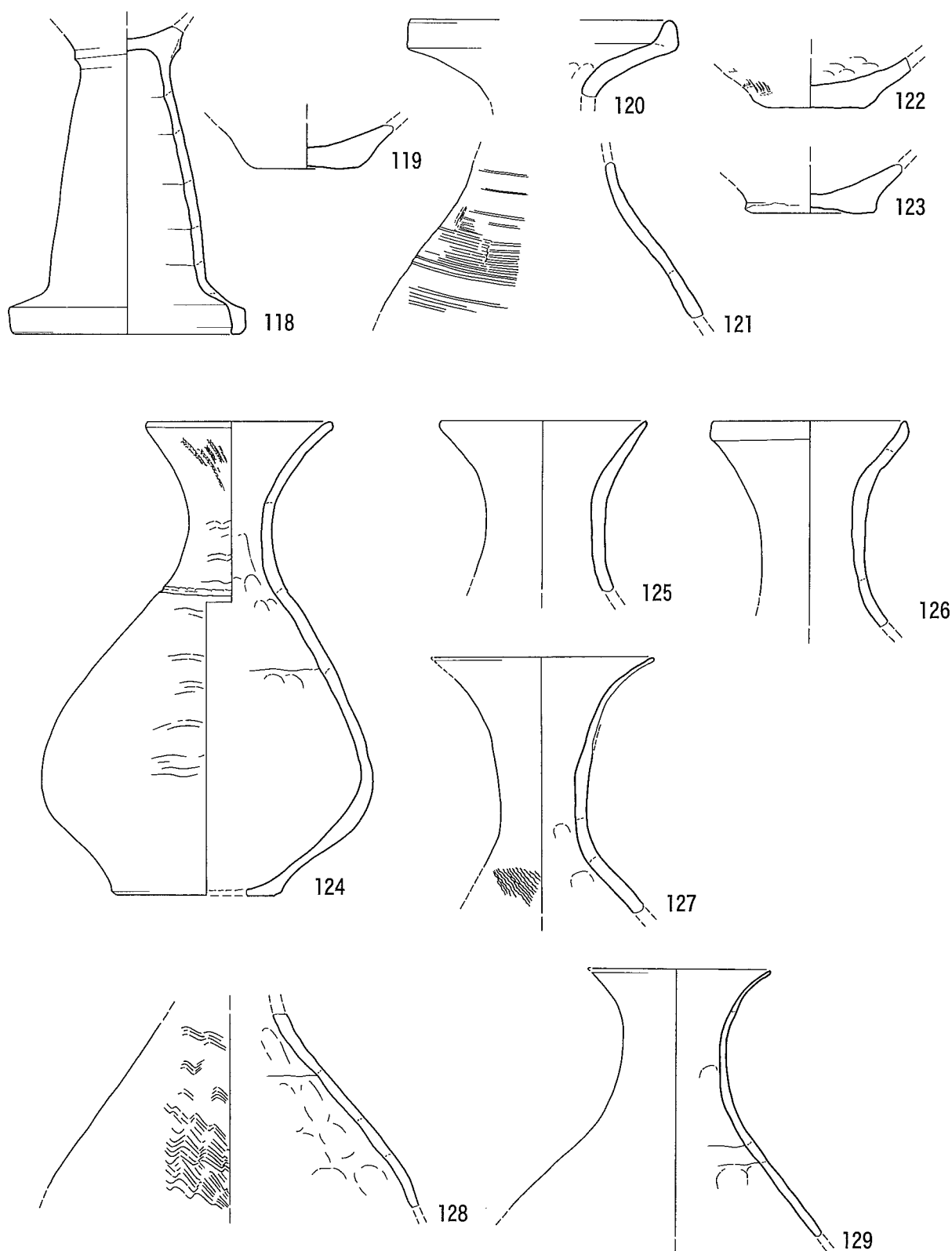
第20图 土器実測図 7

89=西工区P-20 93=第1工区SD1 100=第1工区SX1
 90=西工区P-26 94=第1工区SD2 101・102=第2工区SD2
 91=西工区P-35 95・96=第1工区SD4
 92=西工区P-38 97~99=第1工区P-9



103~117=第2工区SD3

第21図 土器実測図8



第22図 土器実測図9

118・119=第2工区SD4
120~123=第2工区SD5
124~129=第3工区SD1

d 東工区SD12 (第17図57～59 写真図版4)

西工区SD1 (第18図66・67)

東工区のSD12と、西工区のSD1は同一遺構の可能性が高い。第17図の58・59は、壺の破片で59は、肩部に凸帯を巡らした後、楕円形の押圧文を付しており、頸部との境には二条の沈線が巡る。58も壺の胴部の破片である。縦方向へのミガキとハケ調整が僅かに確認できるが、表面が劣化しているため、全容は不明である。57は甕の口縁部の破片で、胴部には斜め方向への条痕を施し、口縁端部は楕円形の押圧を加えている。66は壺の口縁で、外面下端には、キザミを付している。

e 第2工区SD2 (第20図101・102 写真図版6)

台付鉢形甕の脚部である。第20図101は、脚部外面に縦方向へのケズリが見られる。特徴的な形状として、鉢部底面中央に、直径5.0cmの穿孔があることである。焼成前に両側から穿っている。102もやや偏平な単脚であるが、直径4.5cmの穿孔がある。焼成前に、鉢部側と脚部内側から穿っている。

f 第3工区SD1 (第22図124～129 写真図版7)

第22図の124から129で、壺の破片である。口縁端部は基本的に単純口縁である。124の頸部は細長く、頸部と胴部の境には、斜め方向に縄文の施文が僅かに残る。124は、頸部と胴部の境に櫛刺突による沈線が一条巡り、この上下に、横位への緩やかな波状文が認められる。128では、胴部外面に櫛描波状文が、斜め方向に施文されている。

g 東工区SD2 (第14図7～10 写真図版1)

第14図8は、胴部下半に稜をもち、頸部から胴部上半に縦から、斜め方向へ櫛描文を施す。口縁端部には、僅かな折り返しを有する。9と11は甕の破片で、口縁内面に縄文を施している。

12は所謂「錨状口縁高坏」で、ハの字状に開く坏部に、ほぼ水平に開く錨状の単純口縁部をもつ。22も高坏の脚部の破片で、断面三角形の無文の一条突帯が付されている。

h 東工区SD4 (第15図27～32 写真図版2)

第15図32は高坏の脚部のである。僅かに隆起した断面三角形の無文の一条突帯が付されている。外面の一部に赤彩が残る。30は壺の胴部の破片である。斜格子状の櫛描文が残る。

i 東工区SD7 (第16図33～46 写真図版2・3)

西工区SD6 (第16図47～50 写真図版3)

第16図37と39から41及び、第16図の48は高坏の破片である。39は所謂「錨状口縁高坏」で、ハの字状に開く坏部に、ほぼ水平に開く錨状の単純口縁部をもつ。40では断面三角形の無文の一条突帯が付されている。48では櫛描羽状文を施している。

j 東工区P-43 (第17図65)

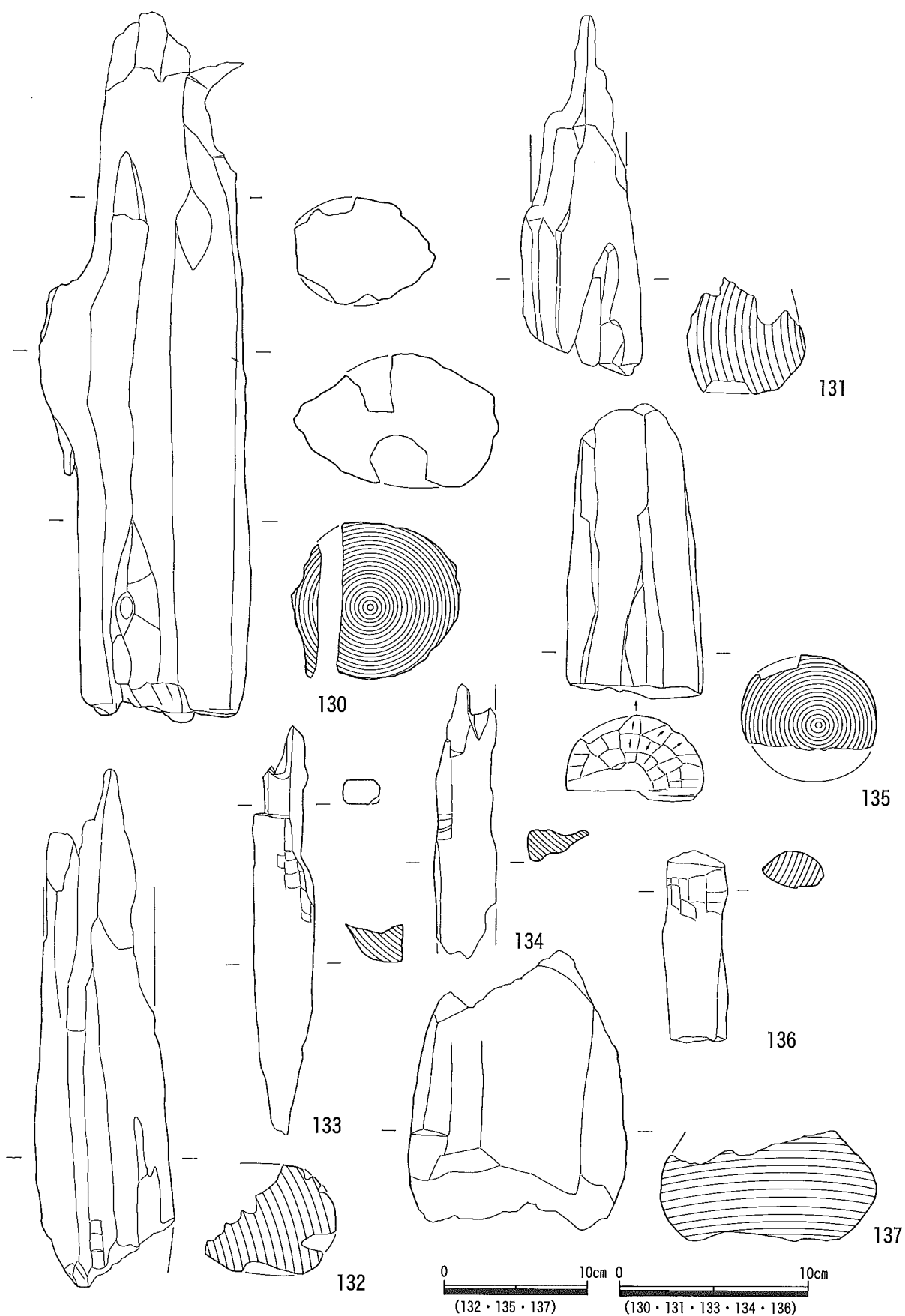
65は須恵器の坏身である。口径9.0cm、最大径10.5cmを測り、最大高は4.0cmである。

k 東工区V層 (遺物包含層) (第17図63・64)

64は須恵器の坏蓋で、口径12.9cmを測り、最大高は4.2cmである。63は摘み蓋の須恵器である。口径15.2cm、最大径15.7cmを測り、総高は4.3cmである。坏部高は3.5cm、摘み高は0.8cm、摘み径は3.8cmである。

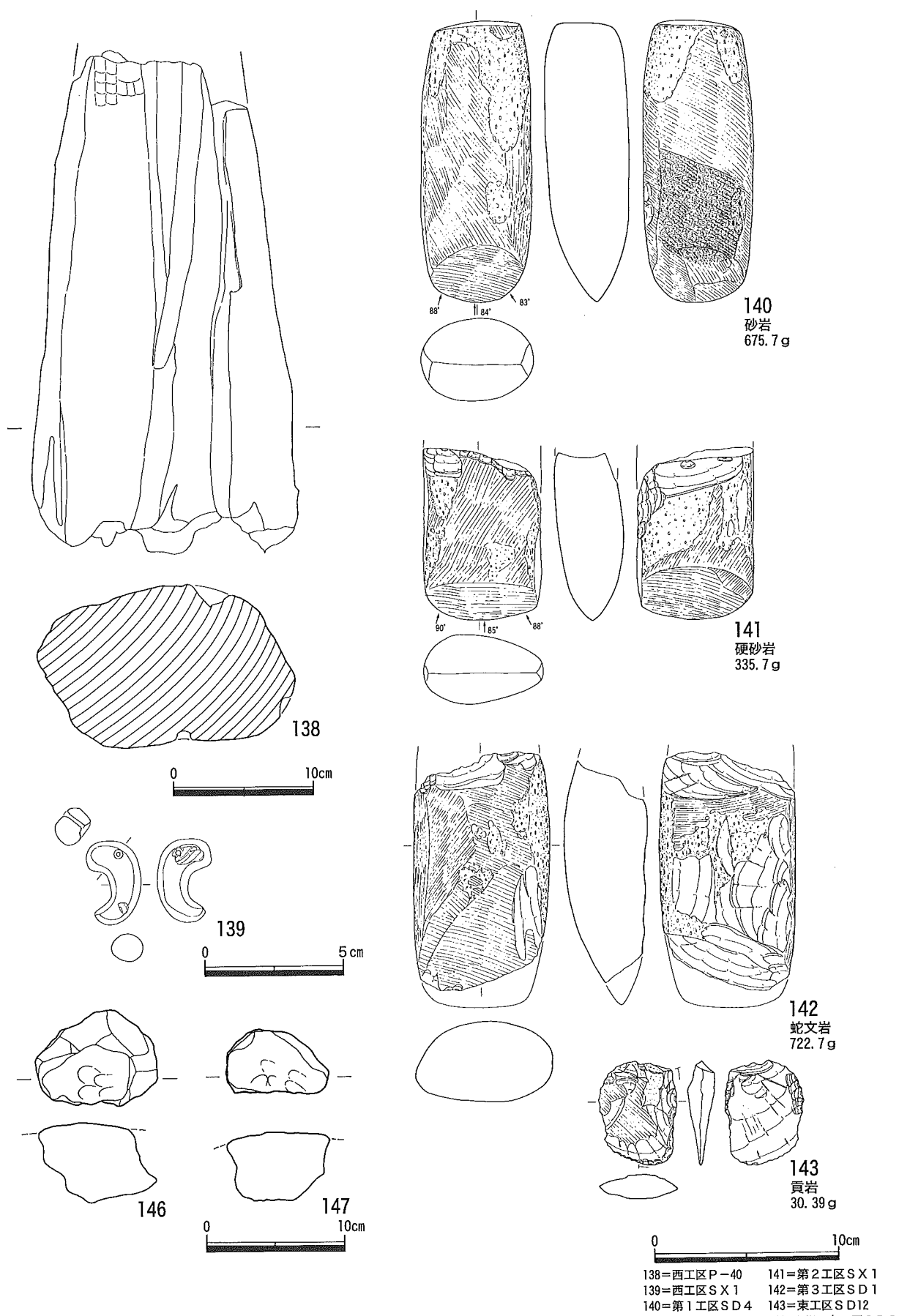
8 遺物【木製品】 (第23図130～137 写真図版8)

樹種同定を行った木製品について、概要を以下で述べる。第23図130は東工区SH1の柱1とした遺構から出土した。木取りは芯材で、一方の端部は欠損するものの、対面はほぼ水平に加工切断されている。樹種はヒノキである。131は東工区P-47から出土した。木取りは辺材で、コナラ属コナ



130=東工区SH 1
131=東工区P-47
132~134=東工区P-52
135・136=東工区P-53
137=東工区P-54

第23図 木製品実測図 1



第24図 木製品2・勾玉1・石器1・台盤状土製品1実測図

ラ節である。一方の端部は欠損するものの、対面は斜めに加工切断されている。132は東工区P-52から出土した。木取りは辺材で、両端を欠損している。樹種はコナラ属コナラ節である。

135は東工区P-53から出土した。ほぼ水平に加工切断された端面には、工具による放射状の痕跡が観察できる。木取りは心材で、樹種はマキ属である。137は東工区P-54から出土した。端面及び表面劣化により、加工痕は不明である。木取りは辺材で、樹種はコウヤマキである。

なお、樹種同定は市道下山梨山科線改築工事に伴う『鶴田Ⅰ遺跡 一本文編一』2008年の、株式会社古環境研究所による考察に詳しい。

9 遺物【石製品】(第24図140～143 写真図版9)

今回の調査で、石器は合計4点出土している。第24図140は第1工区SD4から出土した磨製石斧(伐採斧)で、砂岩である。重さは675.7gである。ほぼ完形で、一方の面に、中央から刃部にかけて斜め方向(長軸方向に対して、概ね70度)に黒色に変色した部分が観察されており、被熱している可能性もある。141は、第2工区のSX1から出土した両刃の石斧である。硬砂岩を使用し、重さは335.7gである。基部が、斜め方向に欠損している。142は、第3工区のSD1より出土した石斧(伐採斧)である。蛇紋岩を使用し、重さは722.7gである。刃部と基部がそれぞれ、斜め方向に欠損している。143は東工区のSD12から出土しているスクレイパーで、頁岩である。重さは30.39gである。

139は西工区SX1内の小穴から出土した勾玉である。瑪瑙を使用し、片側穿孔をしている。穿孔の際、反対面が大きく剥離している。

10 遺物【土製品】(第24図146・147 写真図版9)

東工区SD8より出土した、所謂「台盤状土製品」[森1996]である。146・147共に大半を欠損しているため全体の形状は明らかでないが、残存する面が平坦であることから、分厚い円盤状を呈する「A類」に属する可能性が高い。表面・断面ともに、極度の赤変は観察できない。また煤の付着もない。

第V章 まとめ

遺構・遺物の年代 まず前項で触れた遺物の特徴と、遺構の調査所見を総合すると、年代を特定できる主な資料は、以下のとおりである。

時 期		鶴田Ⅰ遺跡の主な遺構	基 準 資 料
弥生時代中期	中葉	東工区SD1 東工区SD3 東工区SD8+西工区SD2(下層) 東工区SD12+西工区SD1 第2工区SD2	掛之上遺跡18次・SK24 掛之上遺跡18次・SP20
	後葉		掛之上遺跡18次・SK7
弥生時代後期	前葉	第2工区SD3+第3工区SD1	鶴松遺跡9次・遺構004 鶴松遺跡3次・SD1
	中葉	東工区SD2 東工区SD7+西工区SD6	堀越ジョウヤマ遺跡・溝1

前述資料の内、弥生時代後期中葉とした東工区SD2の遺物は、第14図9や第15図11に見るように、中期の特徴を示す資料や、第14図8や第15図14・16・17・19など後期中葉ごろの形態を持つものが混在している。

こうした状況は、遺構の説明の中で、東工区SD2が、SD1やSD3と接していることなどから、切合い関係の中で、遺物の混在が見られることを表しているものと判断できる。

同様に、東工区SD7と西工区SD6についても、土層の観察からは特定できなかったものの、複数の溝の絡み合いが存在している可能性が高く、第16図33・36などの中期的特徴を有するものから、第16図37の後期中葉ごろの特徴を有するものまでが混在している状況が裏付けている。

台付甕の出現 その他の遺構出土資料については、一括性が高いものと判断でき、調査区の北側を中心に、弥生時代中期中葉の良好な資料を提示できた。

この中で特に注意される点は、西工区SD2（下層）の出土資料の中に、台付甕の脚部が存在することである（第19図85）。当該地域では、従来、台付甕がIV－1様式（白岩式併行）に出現する可能性が指摘されてきたが〔荻野谷2002〕、更に遡るⅢ様式（嶺田式併行）に出現している事を示す資料である。

同様の事例は、近年調査が継続的に行われている袋井市掛之上遺跡において、資料が徐々に増加してきており、掛之上遺跡18次調査SK24やSP20において〔袋井市教委2003〕、具体例が提示できる。

更に、西工区SD2（下層）に連続する可能性の高い東工区SD8からは、所謂「台盤状土製品」〔森1996〕が出土しており、当該地における煮沸形態を考えるうえで、今後重要となるものと考えられる。

穿孔された土器 第2工区のSD2からは、台付甕の底部が穿孔されたものが出土した（第20図101・102）。貯蔵・貯水を目的とする用途には、形状的に不向きである。現段階では資料数も少なく、明確な用途を提示できないが、器形や部位は異なるものの、袋井市内の弥生土器には、甕の底部に穿孔のある鶴松遺跡2次SD4資料、高坪の脚部側面に穿孔のある掛之上遺跡7次SK22資料〔袋井市教委2001〕、5・6・8次SZ3東溝資料〔袋井市教委2002〕、鶴田I遺跡の事例と同様に、台付甕の底部に穿孔のある掛之上遺跡5・6・8次SZ1西溝資料〔袋井市教委2002〕などがある。

集落の景観 今回の調査は、南北に細長い調査区であったため、個々に検出した遺構の性格を特定するまでの所見を得られていない。但し、確認した遺構の多くが、溝であることから、遺跡周辺に水が存在したことは明らかである。こうした状況は、花粉分析の結果から周囲は湿地の環境で、水田が分布していた可能性が指摘されていることと符号する。

水田については、土層断面の観察による土壌の攪拌や、タテネの存在等確認はできなかったが、僅かに可能性のあるものとしては、第2調査区のSD8の南側で、東西方向に伸びる畦状の痕跡を四条ほど確認した。但し、平面や断面の精査においても、明瞭な起伏は確認できなかった（第7図）。

従来、太田川流域での弥生時代の集落の変遷の中では、鶴松遺跡が中期に成立し、後期へと継続的に発展していく中で、拠点的な集落との位置づけがなされてきた。

今回の鶴田I遺跡での調査所見によって、集落本体の状況を掴むまでには至らないまでも、中期に遡る一括性の高い溝の存在は、鶴松遺跡以外に、早くも中期段階に、自然堤防上に集落の形成がなされていたことが明らかとなった点で重要である。

また、鶴松遺跡同様に、後期の段階まで継続的な発展を遂げている点も重要で、太田川流域での弥生時代の集落が、一元的な展開ではなかったことは、従来の認識を覆すものであった。

弥生時代の後、東工区P-43などでIV期前半（7世紀中葉）〔鈴木2001〕の遺構を見ることができ
る。図示出来ない細片が多いが、東工区北半や西工区、第2工区に散在的に、須恵器片を含む遺構が
存在しており、7世紀末葉ごろまでの土器の可能性が高い。

【須恵器片の出土した主な遺構】〔東工区〕P-8・9・25・26・28・30～34・36・39・41・43・44・
SH2の柱1・2〔西工区〕P-2・6・10・11・29・32・SD6・SD7〔第2工区〕SX1・SX
2・SD4

墳砂 第3工区SD3で検出した「墳砂」は、堆積した基本土層の各層を突き破っており、現代
の水田耕作土とした第I層直下まで到達している。当該地域では、昭和19年（1944年）12月7日に、
M8.0の東南海地震が発生しており、該期に、液化化によって形成されたものである可能性が高い。

【参考文献】

- | | |
|-------------|--|
| 岩本 貴 | 1995 「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人 静岡県 財団法人 静岡県埋蔵文
埋蔵文化財調査研究所設立 10周年記念論文集』 化財調査研究所 |
| 荻野谷正宏 | 2000 「「白岩式土器」の再検討」『転機』7号 転機刊行会 |
| 荻野谷正宏 | 2002 「東遠江地域 IV様式」『弥生土器の様式と編年』東海編 加納俊介・石黒立人 |
| 鈴木敏則 | 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の 東海土器研究会
出現から消滅』第5分冊 補遺・論考編 |
| 松井一明 | 1985 「嶺田式土器の検討 ―とくに壺形土器について―」『転 転機刊行会
機』創刊号 |
| 松井一明 | 1998 「袋井市春岡遺跡の水田跡」『第8回東日本の水田跡を考 東日本の水田跡を考える会
える会―資料集―』 ・群馬大会実行委員会 |
| 白澤 崇・松井一明 | 2002 「袋井市春岡遺跡の水田跡」『第10回東日本の水田跡を考 東日本の水田跡を考える会
える会―資料集―』 |
| 村木 誠 | 2006 「伊勢湾地方における台付甕の作り方 ―弥生時代後期を 日本考古学会
中心に―」『日本考古学』第21号 |
| 森 泰通 | 1996 「台盤状土製品から台付甕へ―その変化と背景―」『鍋と 東海考古学フォーラム
甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1981 『袋井市一色前田遺跡』 静岡県袋井市教育委員会 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1983 『鶴松遺跡 III』 静岡県袋井市教育委員会 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1998 『鶴松遺跡 IX』 静岡県袋井市教育委員会 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1991 『袋井市鶴田II遺跡』 静岡県袋井市教育委員会 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1991 『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』 静岡県袋井市教育委員会 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 1998 『はるおか遺跡群―見えてきた昔の春岡―』袋井市春岡 静岡県袋井市教育委員会
地区区画整理事業に伴う春岡遺跡群発掘調査概要報告書 |
| 静岡県袋井市教育委員会 | 2003 『平成12年度 掛之上遺跡VII ―本文編―』 静岡県袋井市教育委員会 |
| ・袋井市役所建設経済部 | 2003 『平成13年度 掛之上遺跡VI・VIII ―本文編―』 |
| 区画整理課 | 2003 『平成14年度 掛之上遺跡18 ―本文編―』 |

遺物取り上げ（管理）表 1

遺物番号	取り上げ（管理）番号	年度	工区	出土遺構	層位	図版	写真図版
1	67-2	17	東	SD 1		14	1
2	70	17	東	SD 1			
3	74	17	東	SD 1			1
4	73	17	東	SD 1			
5	67-1	17	東	SD 1			
6	67	17	東	SD 1			
7	21	17	東	SD 2			1
8	22. 26. 28	17	東	SD 2			1
9	27	17	東	SD 2			1
10	29	17	東	SD 2			1
11	133. 136	17	東	SD 2		15	
12	14. 15	17	東	SD 2			
13	10	17	東	SD 2			
14	31	17	東	SD 2			2
15	8. 12. 13. 22. 28. 133	17	東	SD 2			2
16	25	17	東	SD 2			2
17	25	17	東	SD 2			2
18	17. 18	17	東	SD 2			
19	3	17	東	SD 2			
20	13. 133	17	東	SD 2			
21	8	17	東	SD 2			2
22	8	17	東	SD 2			
23	8	17	東	SD 2			
24	133	17	東	SD 2			
25	79	17	東	SD 3			
26	80	17	東	SD 3			2
27	78	17	東	SD 4			
28	78	17	東	SD 4			
29	77	17	東	SD 4			
30	77	17	東	SD 4			2
31	78	17	東	SD 4			
32	76	17	東	SD 4			
33	64	17	東	SD 7		16	2
34	64	17	東	SD 7			
35	48	17	東	SD 7			
36	64	17	東	SD 7			
37	53	17	東	SD 7			
38	61	17	東	SD 7			
39	46	17	東	SD 7			3
40	46	17	東	SD 7			3
41	57	17	東	SD 7			3
42	64	17	東	SD 7			
43	64	17	東	SD 7			
44	53	17	東	SD 7			3
45	59	17	東	SD 7			3
46	49	17	東	SD 7			
47	238	17	西	SD 6	下層		3
48	239	17	西	SD 6	下層		3
49	235	17	西	SD 6			
50	239	17	西	SD 6	下層		
51	32. 35. 38. 40	17	東	SD 8		17	4
52	34	17	東	SD 8			
53	42	17	東	SD 8			
54	45	17	東	SD 8			4
55	41. 43	17	東	SD 8			
56	32	17	東	SD 8			4
57	91	17	東	SD 12			
58	91	17	東	SD 12			4
59	87	17	東	SD 12			
60	124	17	東	P-2			4
61	124	17	東	P-2			
62	146	17	東	P-5			
63	96	17	東	包含層			
64	97	17	東	包含層			
65	115	17	東	P-43			
66	230	17	西	SD 1		18	
67	230	17	西	SD 1			
68	225	17	西	SD 2	上層		
69	202. 203	17	西	SD 2	上層		4
70	221	17	西	SD 2	上層		
71	226	17	西	SD 2	上層		4
72	202. 203	17	西	SD 2	上層		4

遺物取り上げ（管理）表2

遺物番号	取り上げ（管理）番号	年度	工区	出土遺構	層位	図版	写真図版
73	225	17	西	SD 2	上層	18	
74	284	17	西	SD 2	上層		
75	218	17	西	SD 2	下層		5
76	209	17	西	SD 2	下層		
77	220	17	西	SD 2	下層	19	
78	220	17	西	SD 2	下層		
79	210	17	西	SD 2	下層		
80	217	17	西	SD 2	下層		5
81	290	17	西	SD 2	下層		5
82	215	17	西	SD 2	下層		5
83	219	17	西	SD 2	下層		5
84	206	17	西	SD 2	下層		
85	229	17	西	SD 2	下層		
86	229	17	西	SD 2	下層		
87	206	17	西	SD 2	下層		
88	211	17	西	SD 2	下層		
89	246	17	西	P-20		20	5
90	267	17	西	P-26			
91	265	17	西	P-35			
92	259or260	17	西	P-38			6
93	291	18	第1	SD 1			
94	333	18	第1	SD 2			6
95	294	18	第1	SD 4			
96	294	18	第1	SD 4			
97	307	18	第1	P-9			
98	307	18	第1	P-9			
99	307	18	第1	P-9			
100	296	18	第1	SX 1			
101	370	18	第2	SD 2			6
102	325	18	第2	SD 2			6
103	349	18	第2	SD 3		21	
104	343	18	第2	SD 3			
105	324, 340	18	第2	SD 3			
106	340, 351, 355	18	第2	SD 3			6
107	340	18	第2	SD 3			
108	354	18	第2	SD 3			6
109	346	18	第2	SD 3			6
110	350	18	第2	SD 3			6
111	343	18	第2	SD 3			
112	349	18	第2	SD 3			
113	356	18	第2	SD 3			
114	345	18	第2	SD 3			
115	338	18	第2	SD 3	下層東端		6
116	339, 340, 356	18	第2	SD 3			
117	339, 340	18	第2	SD 3			7
118	327, 352	18	第2	SD 4		22	7
119	330	18	第2	SD 4			
120	364	18	第2	SD 5			
121	341, 357	18	第2	SD 5			
122	364	18	第2	SD 5			
123	344	18	第2	SD 5			
124	491	18	第3	SD 1			7
125	479	18	第3	SD 1			7
126	478	18	第3	SD 1			7
127	486	18	第3	SD 1			7
128	480	18	第3	SD 1			
129	476, 477, 490	18	第3	SD 1			7
130		17	東	SH 1		23	8
131		17	東	P-47			
132		17	東	P-52			8
133		17	東	P-52			
134		17	東	P-52			
135		17	東	P-53			8
136		17	東	P-53			
137		17	東	P-54			8
138		17	西	P-40		24	8
139		17	西	SX 1			9
140		18	第1	SD 4			9
141	347	18	第2	SX 1			9
142		18	第3	SD 1			9
143	88	17	東	SD 12			9
144		17	西	SD 2	下層		8
145		17	西	SD 2	下層		8
146		17	東	SD 8		24	
147	34	17	東	SD 8			

写真図版



1



3



7



8



9



10

1・3=東工区 SD1
7~10=東工区 SD2



14



15



16



17



21



26



30



33

14~17・21=東工区 SD 2
26=東工区 SD 3
30=東工区 SD 4
33=東工区 SD 7



39



44



40



45



47



41



48

39~41・44・45=東工区 SD 7
47・48=西工区 SD 6



51



54



56



58



60



69



71



72

51・54・56=東工区 SD 8
58=東工区 SD12
60=東工区 P-2
69・71・72=西工区 SD 2



75



83



81



80



82



89

75 · 80~83=西工区 SD 2
89=西工区 P-20



92



94



101-A



101-B



102



106



108



109



110



115

92=西工区 P-38
94=第1工区 SD2
101・102=第2工区 SD2
106・108~110・115=第2工区 SD3



117



125



126



118



127



124



129

117=第2工区 SD 3

118=第2工区 SD 4

124~127·129=第3工区 SD 1



144



145



130



132



137



135



138

130=東工区 SH 1

132=東工区 P-52

135=東工区 P-53

137=東工区 P-54

138=西工区 P-40

140・145=西工区 SD 2



140-A



140-B



141-A



141-B



142-A



142-B



143



139

139=西工区 SX 1 142=第3工区 SD 1
140=第1工区 SD 4 143=東工区 SD 12
141=第2工区 SX 1



合成写真（画面下側が北）

報 告 書 抄 録

ふ り が な		つるたいちいせき ほんぶんへん					
書 名		鶴田Ⅰ遺跡 一本文編一					
副 書 名		市道川井山梨線新設工事に伴う発掘調査報告書					
編 集 者 名		白澤 崇					
編 集 機 関		袋井市教育委員会					
所 在 地		〒437-1192 静岡県袋井市浅名1028番地 Tel.0538-23-9269（直通）					
発 行 月 日		2008年3月31日					
所 収 遺 跡 名		鶴田Ⅰ遺跡					
遺 跡 所 在 地		静岡県袋井市下山梨字鶴田2240-2 ほか					
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 46′ 04″	137° 54′ 34″	20050822	1080㎡	市道川井山梨線新設に伴う発掘調査。	
22216	124			20070331			
所収遺跡名		種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特記事項
鶴田Ⅰ遺跡		集落遺跡	弥生時代 古墳時代 奈 良～ 鎌倉時代	溝・柱穴・井戸	弥生土器 須恵器 土師器 石斧 勾玉		噴砂

市道川井山梨線新設工事
に伴う発掘調査報告書

鶴田 I 遺跡

—本文編—

2008年3月31日

編集 袋井市教育委員会
静岡県袋井市浅名1028番地

印刷所 松本印刷株式会社
静岡県榛原郡吉田町片岡2210